

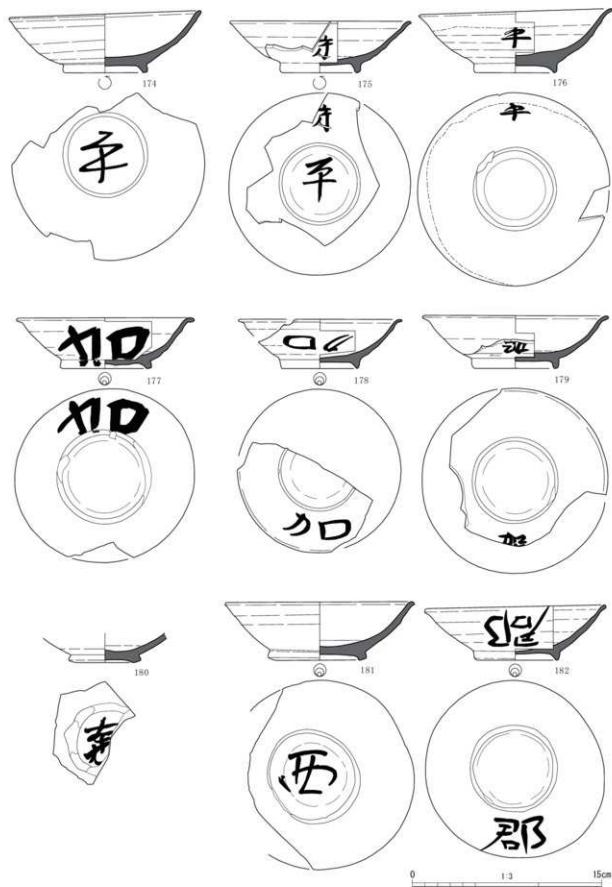


Fig.185 SX01 西部 出土遺物 (19)

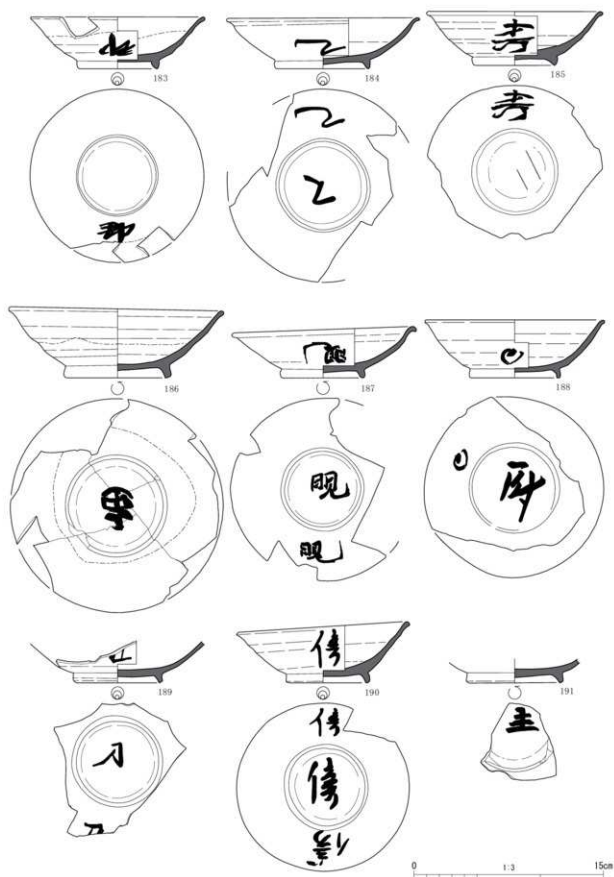


Fig. 186 SX01 西部 出土遺物 (20)

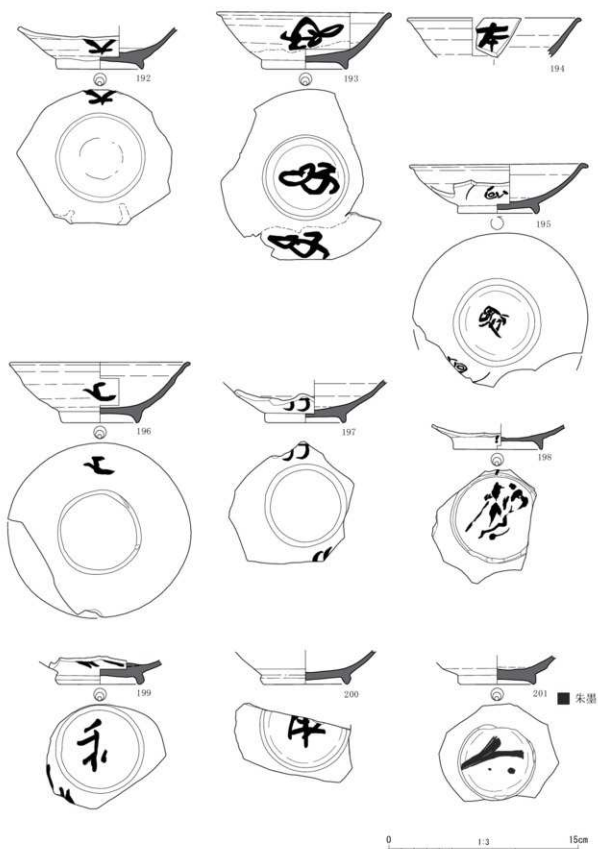


Fig.187 SX01 西部 出土遺物 (21)

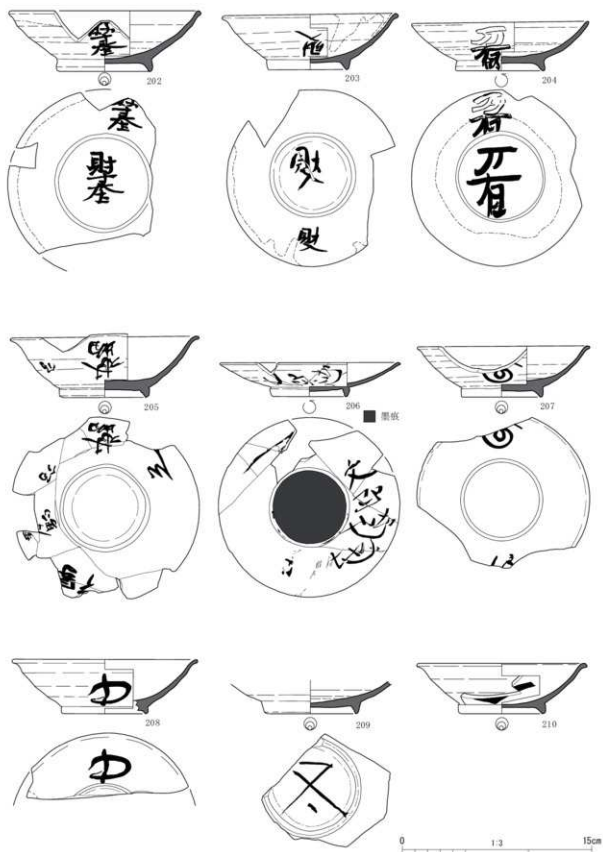


Fig. 188 SX01 西部 出土遺物 (22)

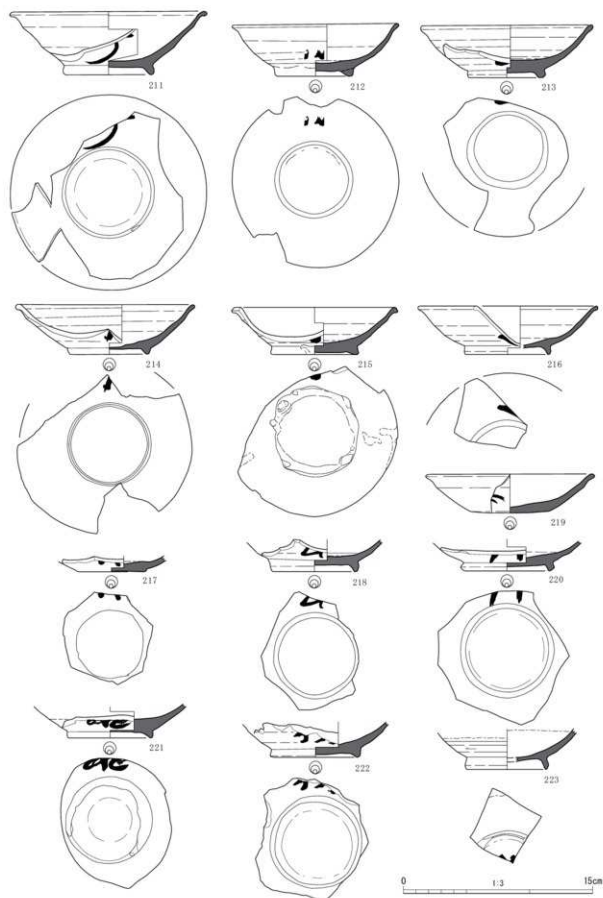


Fig.189 SX01 西部 出土遺物 (23)

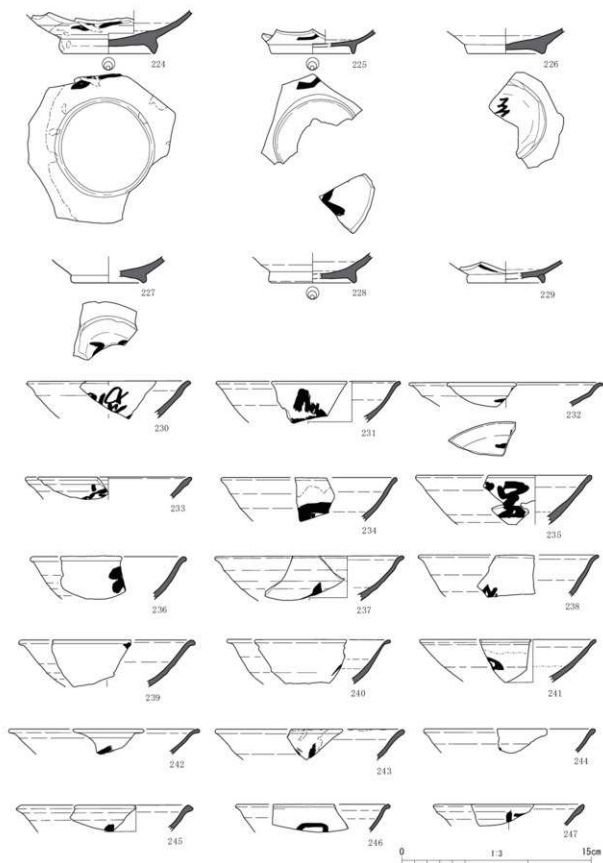


Fig. 190 SX01 西部 出土遺物 (24)

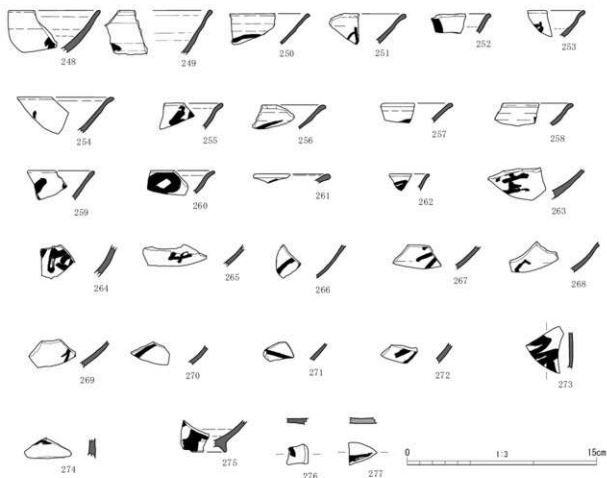


Fig. 191 SX01 西部 出土遺物 (25)

れており、177は正位で、178は逆位で確認される。179は碗の体部に、欠損により不明瞭であるが「賀」と考えられる文字が記されている。180は碗の底部に、欠損により不明瞭であるが「本加」と考えられる文字が記されている。181は碗の底部に「西」が記されている。182・183は碗の体部に逆位で「郡」が記されている。184は碗の体部及び底部に「乙」が記されている。185は碗の体部に墨書が確認されるが判読できない。186は碗の底部に「甲」が記されている。187は碗の体部及び底部に「睨」が記されている。188は底部に「厨」の文字のほか、体部に円状の記号が記されている。189は碗の体部及び底部に「刀」が記されている。190は碗の体部の2箇所及び底部に「傍」が記されている。191は碗の底部に「主」が記されている。192は碗の体部に「大」が記されている。193は碗の体部及び底部に「好」と考えられる文字が記されている。194は体部に「本」が記されている。195～201は墨書と考えられるが文字の判読ができなかった土器を示す。201は朱墨書で記されている。

202は碗の体部及び底部に「財基」が記されている。203は体部及び底部に「財入」が記されている。204は体部及び底部に「刀有」が記されている。205・206は習書の文字が確認される。205は碗の体部に「三」「得」が確認される。欠損により不明瞭であるが「口〇駒」、判読が困難な文字や、一部判読できる「口物」が記されている。206は皿の体部に「文」「正」「也」「地」「地」習書の文字が記されており、底部全面に墨痕が確認される。207～209は碗に記号が記されている。207は

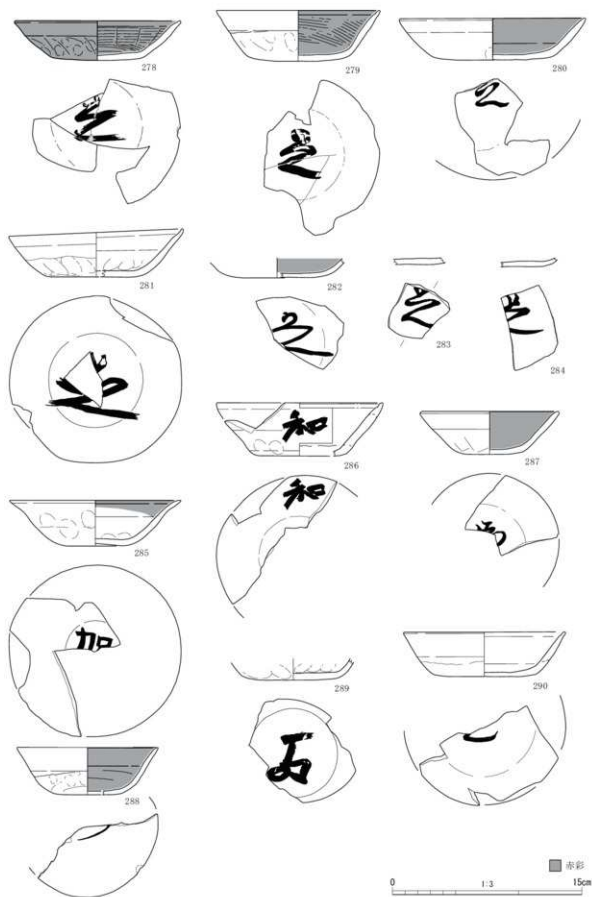


Fig. 192 SX01 西部 出土遺物 (26)

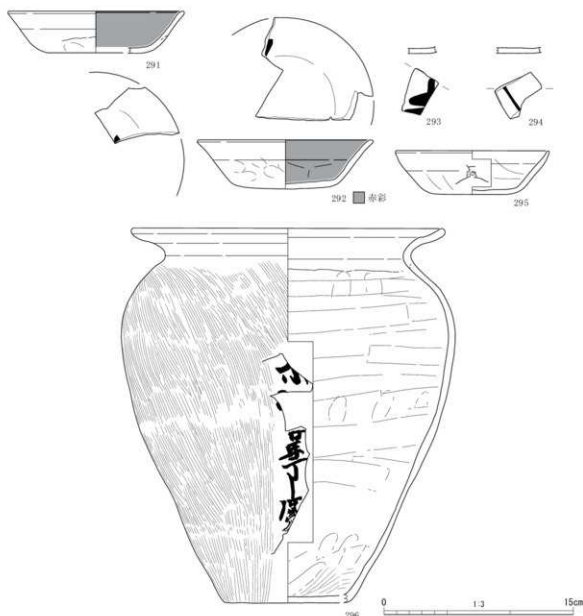


Fig. 193 SX01 西部 出土遺物 (27)

体部に渦巻状の記号が、208はD字状の記号が、209は又の下部に点のある記号が確認される。210～277は墨書と考えられるが文字の判読はできなかった土器を示す。230の文字の判読は難しいが2文字と考えると2文字目は「加」の可能性がある。

278～296は土師器に墨書が記されている。278～284は坏の底部に「足」が記されている。285は欠損により不明瞭であるが坏の底部に「賀」と考えられる文字が記されている。286は坏の体部に「和」が記されている。287・290は坏の底部に欠損により不明瞭であるが「足」と考えられる文字が記されている。289は坏の底部に「石」と考えられる文字が記されている。291～294は文字は確認できるが判読できなかった。295は坏の体部に焼成後に刻書されたと考えられる「貞」が記されている。296は甕の体部に墨書が記されている。欠損によりすべて判読できないが「□□□万呂□□」と記されている。

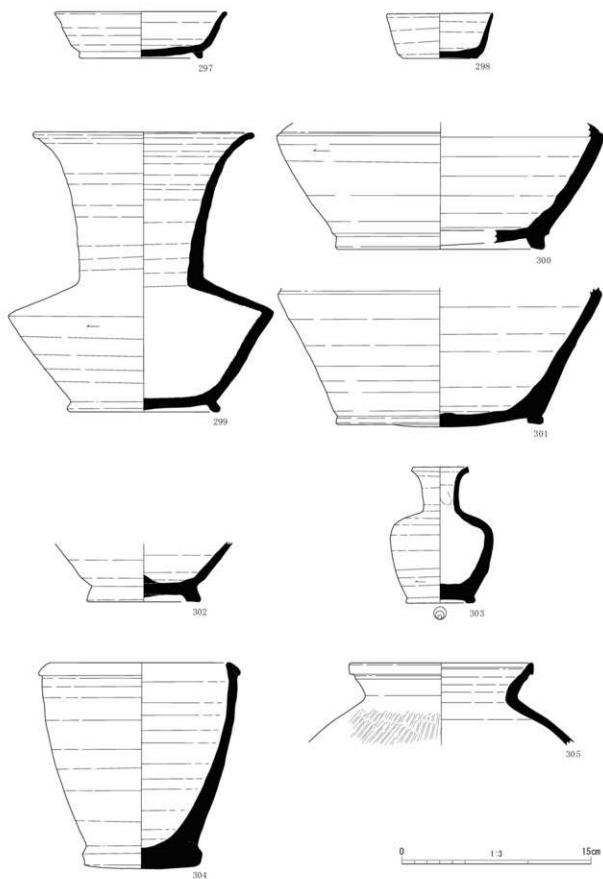


Fig. 194 SX01 西部 出土遺物 (28)

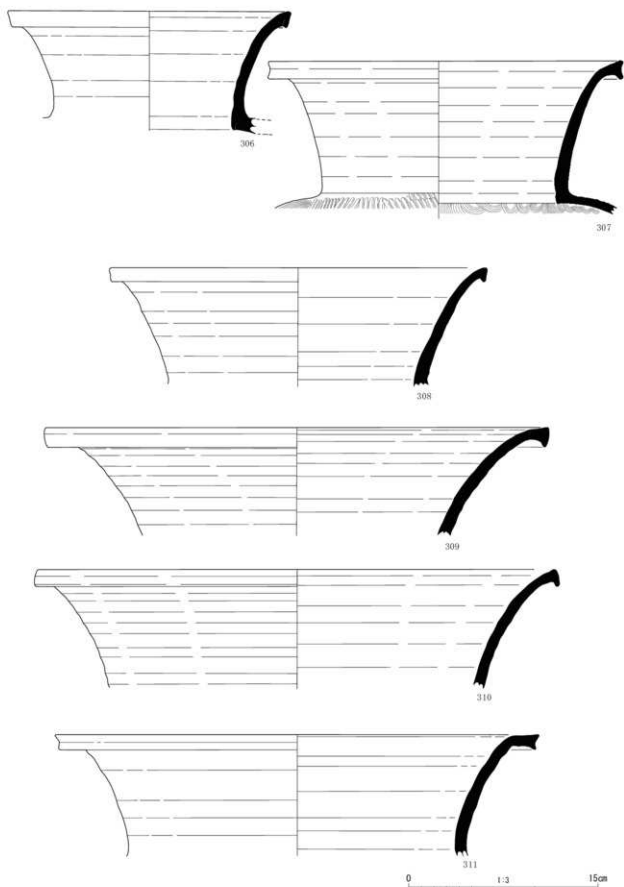


Fig.195 SX01 西部 出土遺物 (29)

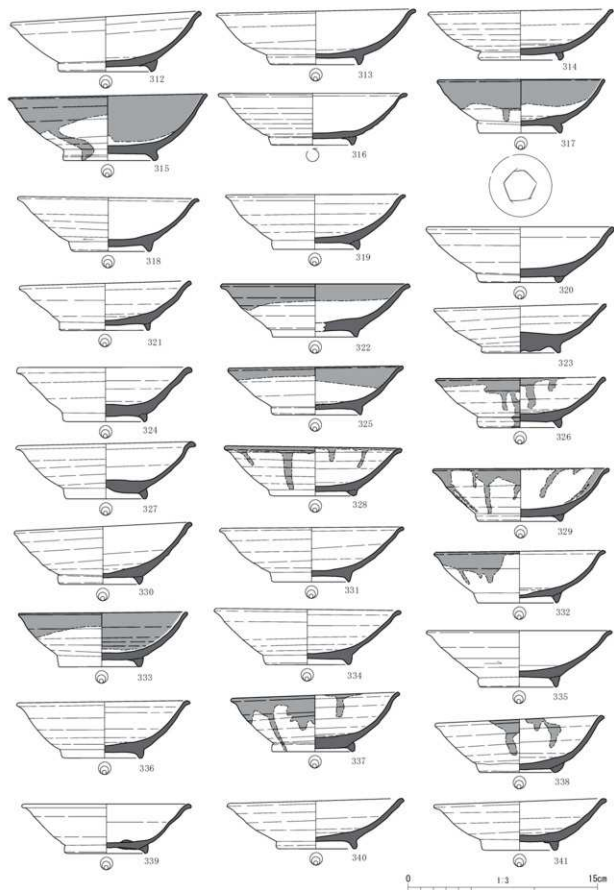


Fig. 196 SX01 西部 出土遺物 (30)

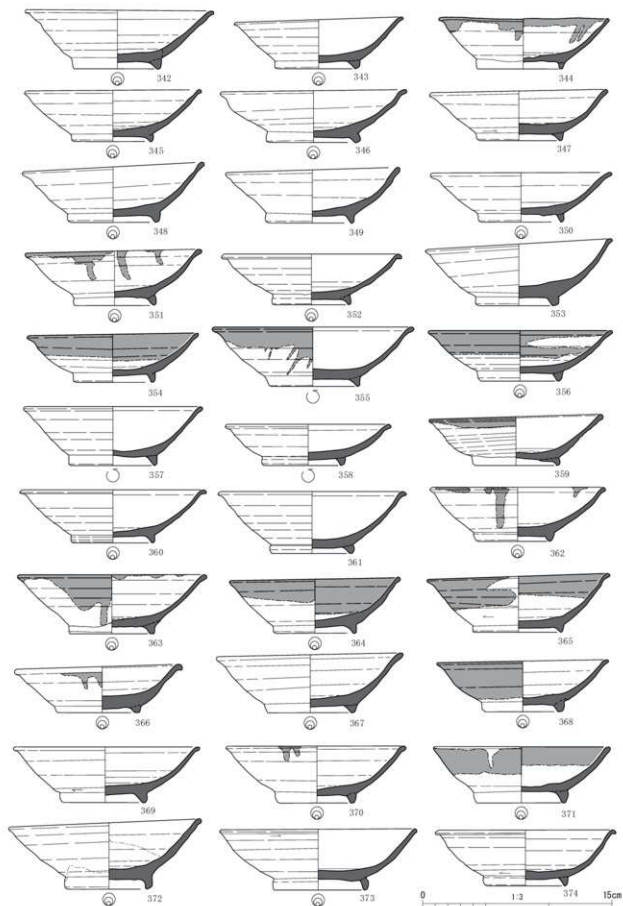


Fig.197 SX01 西部 出土遺物 (31)

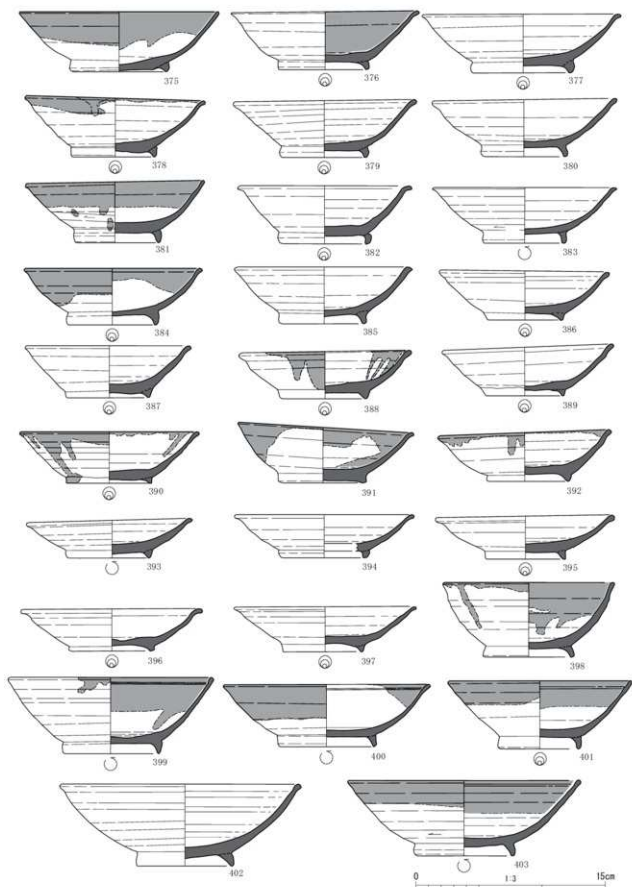


Fig. 198 SX01 西部 出土遺物 (32)

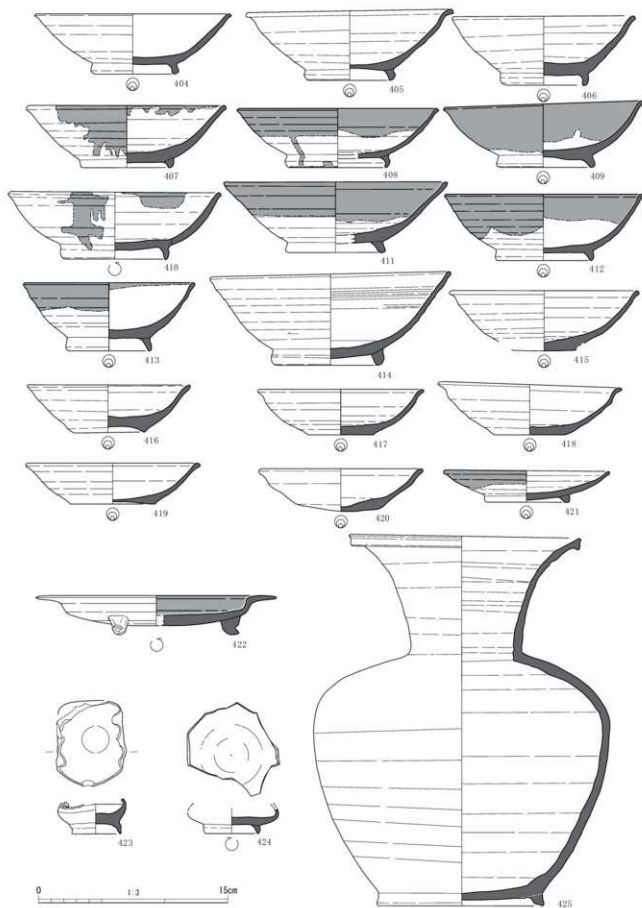


Fig. 199 SX01 西部 出土遺物 (33)

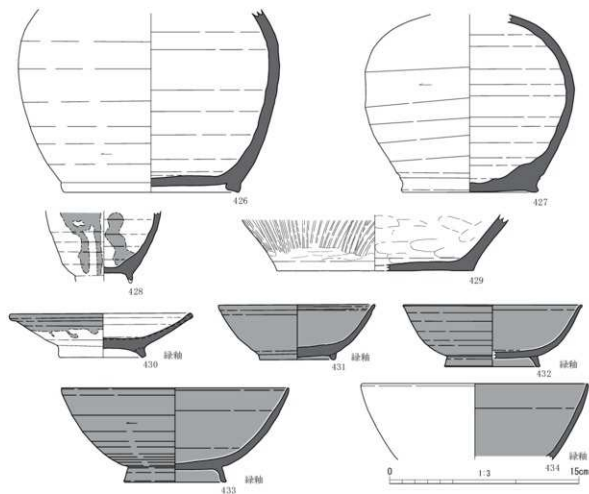


Fig. 200 SX01 西部 出土遺物 (34)

須恵器 (Fig. 194・195) SX01 から出土した須恵器を示す。器種は、有台坏身、箱坏、壺類、陶臼、甕が出土している。灰釉陶器や土師器と比較して出土点数は少ない。

297 は有台坏身である。298 は箱坏である。299 ～ 303 は壺類を示す。299 は広口壺である。肩部が鋭く屈曲する形状である。300・301 は肩部から上部が欠損している。肩部の形状から広口壺と考えられる。301 は底部が高台より突出した形状である。303 は小型の長脛壺である。底部に糸切痕が残る。304 は陶臼である。底部には穿孔はみられない。305 ～ 311 は甕である。305 は上半のみ残存しており、外面体部にタタキ調整が施される。307 は体部がわずかに残存している。外面にタタキ調整が、内面には同心円状の当て具痕が確認される。306 ～ 311 は甕の口縁部である。

灰釉陶器 (Fig. 196 ～ 200) SX01 から出土した 312 ～ 429 を示す。出土したほとんどが碗であり、他にも皿、壺類、甕など出土している。

312 ～ 415 は碗である。施釉がなされていない個体が多い。高台の断面形状や、施釉方法、底部の調整などからⅦ-2 ～ Ⅶ-1 期（9 世紀後半～10 世紀前半）に比定すると考えられる。底部の調整痕には糸切、ヘラケズリ、ナデが確認されており、糸切が多い。高台は三日月高台や三角形の形状が確認されており、高台貼付けのナデが弱い三角形の高台が比較的多い。施釉方法にはハケヌリとツケガケが確認されるが、無釉が半数近くを占める。317 は底部に六角形状の記号が刻ま

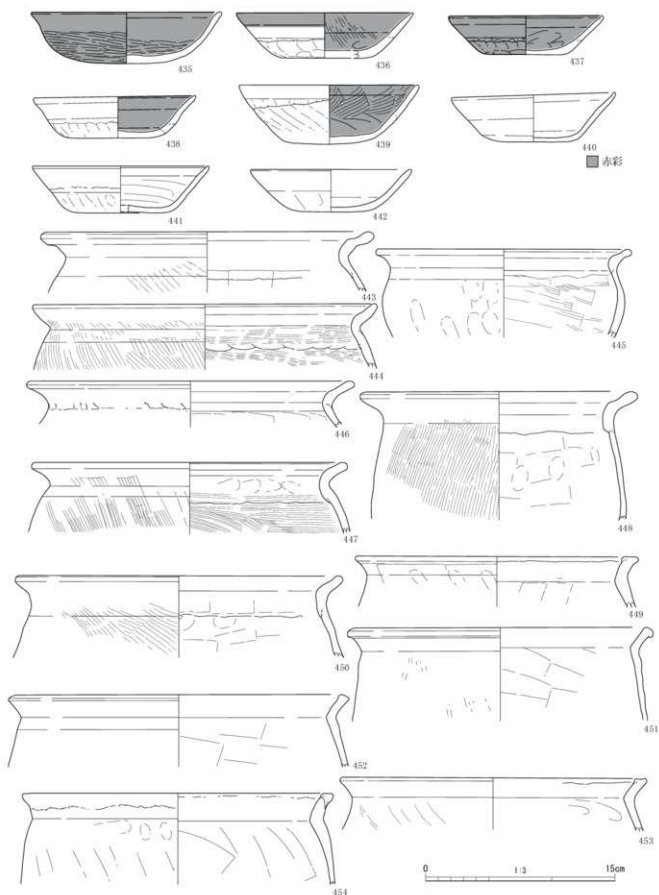


Fig. 201 SX01 西部 出土遺物 (35)

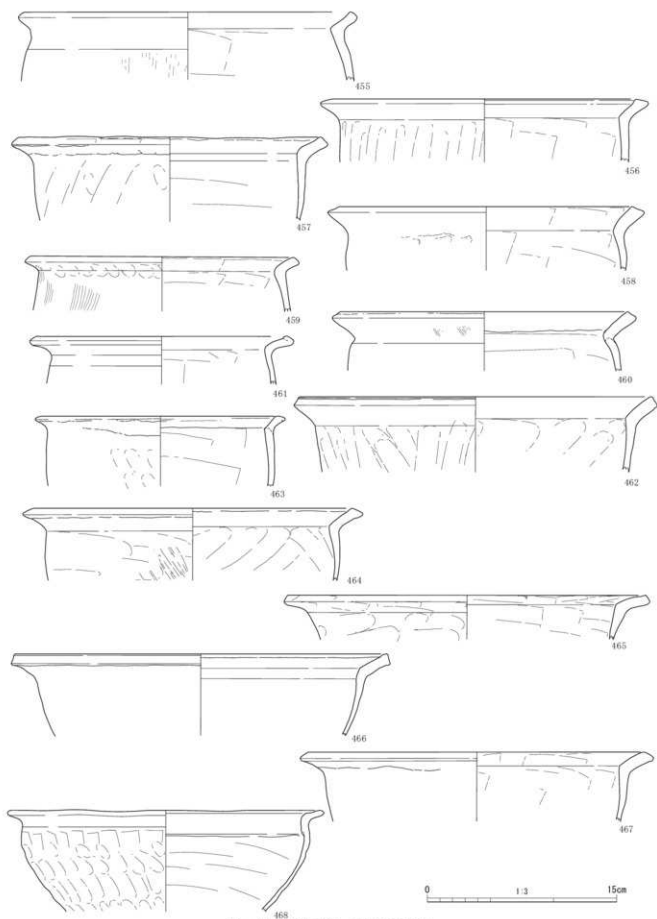


Fig. 202 SX01 西部 出土遺物 (36)

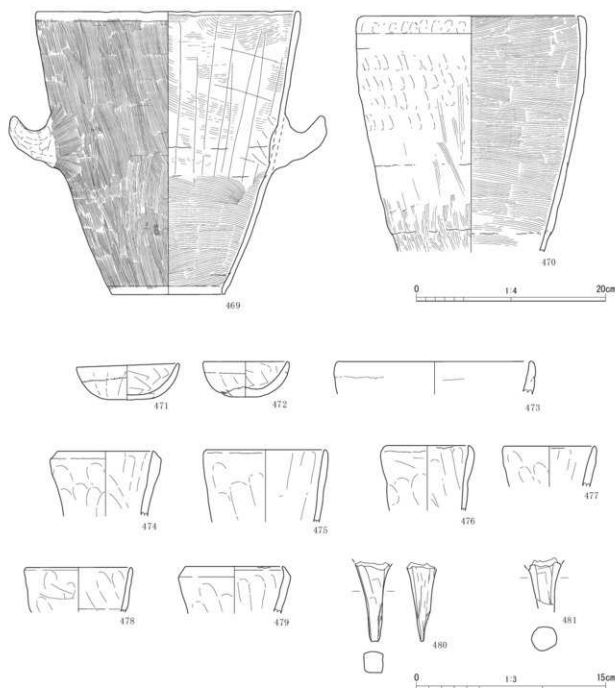


Fig. 203 SX01 西部 出土遺物 (37)

れている。415は高台が欠損により有無が不明瞭であるが、欠損状況により有台の碗と考えられる。416～420は糸切未調整の無台碗である。421は皿である。底部には糸切痕が確認される。422は獣足皿である。423・424は耳皿である。423の耳部は波状であるが424は欠損により不明である。

425～428は壺類である。425は長頸壺で肩部の張り出しは弱い。426・427は体部上半から口縁部にかけて欠損しているが、残存部の形状から長頸壺と考えられる。428は小型の壺で体部上半が欠損により不明である。429は甕の底部から体部にかけての一部である。外面体部にタキ調整がなされており、内面にナデ調整が確認される。430～434は緑釉陶器である。

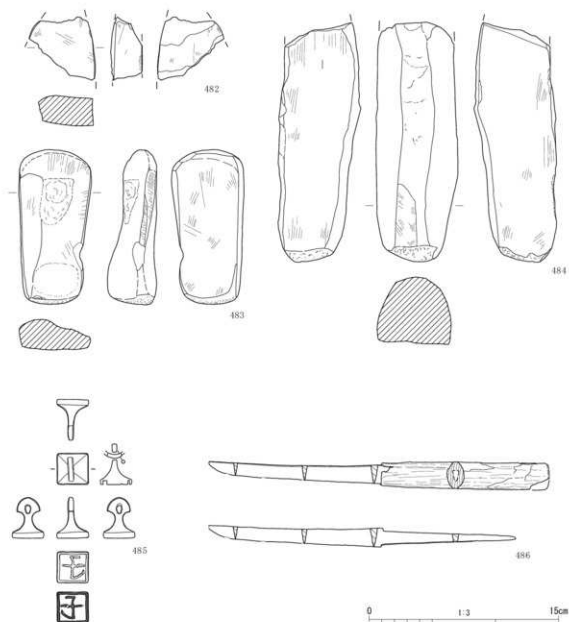


Fig. 204 SX01 西部 出土遺物 (38)

土師器 (Fig. 201 ~ 203) SX01 の西部より出土した 435 ~ 481 を示す。機種は坏や甕が多く、瓶や小型模造品、製塩土器が出土している。

435 ~ 442 は坏である。435 は内外面に赤彩が施されており、内外面ともにミガキ調整が確認される。436 は内面と外面の口縁部に、437 は内外面ともに赤彩が施される。438・439 は内面に赤彩が施される。

443 ~ 468 は甕である。ほとんどが口縁部のみであるが、長胴甕のほかに短胴形態の甕も存在する。465 ~ 468 は肩部の張りがなく、底部に向かうに連れ径が短くなることから短胴形態の甕と考えられる。469・470 は瓶である。470 は、外面は指ナデ、内面はハケメ調整がなされており、把手の痕跡が確認されない。完形で出土しておらず、全体像は不明瞭であるが把手がない形態と推定した。

471・472 は小型模造品の碗である。473 は製塩土器で、内面に布目痕が確認される。474 ~ 481

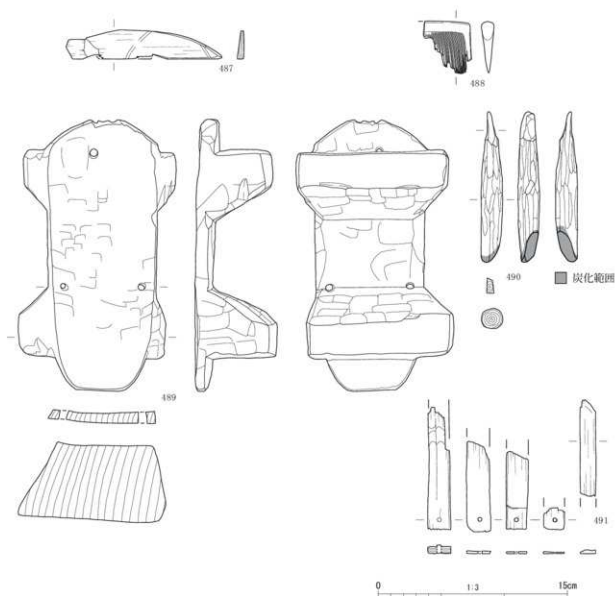


Fig. 205 SX01 西部 出土遺物 (39)

は製塩土器である。口縁部の先端が丸みを帯びるものと尖るものが確認される。480・481は製塩土器の脚部である。

石製品 (Fig. 204) SX01 西部より出土した3点を図示する。482は凝灰岩製の砥石である。上下部が欠損している。483は凝灰岩製の磨面と敲打痕が確認される磨石である。484は片麻岩と推定される石材に4面の磨面が確認される磨石である。

金属製品 (Fig. 204) SX01 西部では2点図示する。485は銅製の印鑑である。印面は方形で鈕は扇状の形状である。鈕の中央に穿孔がなされ、金属製の輪の一部が残存している。印面には「子」が反転した文字がみられる。486は刀子で、木製の柄が残存して出土している。

木製品 (Fig. 205～207) SX01 西部より出土した487～504を示す。器種は、櫛、下駄、曲物、挽物皿、杭のほか加工材が出土している。

487は馬形の可能性がある加工板である。下部に2箇所抉りが確認される。488は横櫛である。

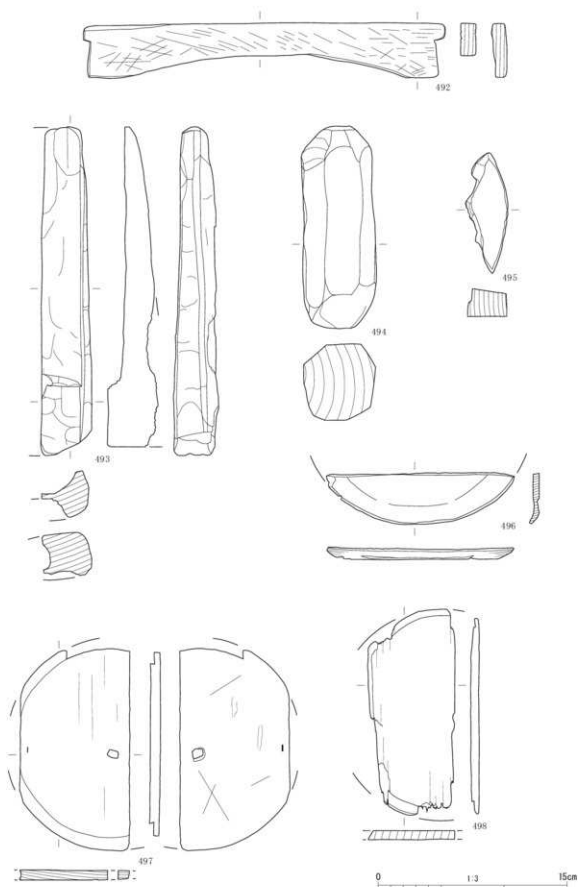


Fig. 206 SX01 西部 出土遺物 (40)

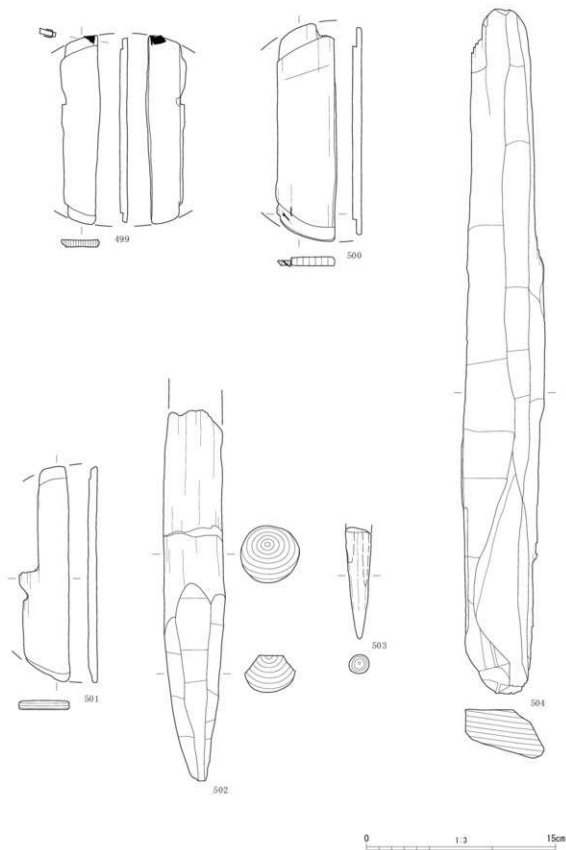


Fig. 207 SX01 西部 出土遺物 (41)

およそ半分が欠損している。489は連歯下駄である。上面に使用による摩耗が確認されるが、歯はほとんど擦り減っており、使用途中に廃棄された可能性がある。490は弓の一部と推定される加工棒で、下部が欠損しており、全体像は不明であるが、丁寧な加工と上部の形状から弓の弦輪をかける部と推定される。491は用途不明の木製品である。出土時、形状の同じ薄板が重ね合わせて下部に木釘で止められて出土していた。扇の要部分の可能性もある。492は台脚と考えられる部材である。片面に刃物傷が複数確認され、二次利用されていたと考えられる。493～495は用途不明の木製品である。494は多角形状に加工されており、中央全周を括る形態の木鐙の未成品と考えられる。496は挽物皿である。497～501は曲物の底板である。497は中央に穿孔が確認される。502・503は杭である。504は用途不明の加工板である。

② SX01 中央部

墨書土器 (Fig. 208～233) SX01西部と同じく須恵器、灰釉陶器、土師器ごとに分け、文字でまとめて遺物を掲載している。ほとんどが1文字書きされた墨書土器であり、「得」、「足」が多数を占める。1文字書きの墨書土器より少数であるが、「得上」などの2文字書きの墨書土器も多数出土している。

505～510は須恵器に墨書が記されている。505は無台碗の底部に「川辺足人」が記されているほか、判読できないが1文字確認される。506は糸切碗の底部に「太」が記されている。507は糸切皿の底部に「足」が記されている。508・509は有台碗で、508は体部、509は底部に「足」が記されている。510は糸切碗で底部に「足」が記されている。

512～781は灰釉陶器に墨書が記されている。512～544は碗の体部に「得」が記されている。ただし、522のみ「得上」が記されていた。544は高台がほかと比較して高く、托に近い形状である。545・546は碗の体部に朱墨で「得」が記されている。547は皿の体部と底部の2箇所に朱墨で「得」が、体部1箇所に墨書で「得」が記されている。548～550は「得」のほか、別の文字が確認される。548は体部に「得」、底部に「上」が記されている。549は体部に「得」のほか、判読できない1文字が記されている。550は体部、底部に「得」が、「平」と考えられる文字が体部に記されている。551・552は無台碗で、体部に「得」が記されており、552は朱墨で記されている。553～558は灰釉陶器の破片に「得」の文字が確認できる。561～562は「得」と考えられる文字が記されている。

563～587は碗に「得上」が墨書で記されている。572は「上」が鏡文字で記されている。578は体部と底部に「得上」が記されている。586・587は皿の体部に「得上」が記されており、586は輪花皿である。588～592は欠損により不明瞭であるが、「得上」が記されていると考えられる。593～595は「上」が記されている。593・594は輪花碗で、594は施釉の上に墨書が記されていた可能性があり、本調査では「得上」が多数出土していることから「得上」と推定することができる。595も同じく、欠損により不明であるが「得上」と推定できる。596～620は碗の体部に「足」が、621～624は碗の底部に「足」が記されている。625～630は「足」2文字、あるいは別の文字が記されている。625は碗の体部に「足」が2文字記されている。626～629は碗の体部及び底部に「足」が記されている。そのうち、626・627は体部の「足」が逆位で記されている。630は碗の体部に朱墨で「足」が、底部に「升」が記されている。631～633は碗の体部に朱墨で「足」が記さ

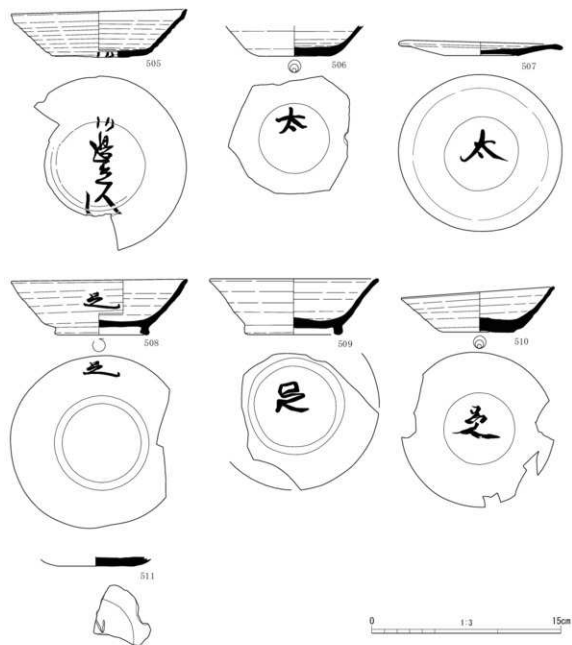


Fig. 208 SX01 中央部 出土遺物 (1)

れている。634は皿の体部に「足」が記されている。635・636は無台碗で、635は体部、636は底部に「足」が記されている。637～643は欠損により不明瞭であるが「足」と記されている可能性がある。642・643は朱墨で記されている。645～647は碗の体部及び底部に「朋万」が記されている。648は碗の体部に「朋万」のほか「足」が記されている。649は碗の体部に朱墨で「足」のほか体部及び底部に「朋万」と推定される文字が記されている。

650は碗の体部及び底部に「水万」が記されている。651・652は碗の体部に「孕」が記されている。653～660は碗に「和」が記されている。653は内面全体に朱墨痕が確認される。654は体部の文字は欠損により判読できない。655～658は体部及び底部に「和」が記されている。そのうち、658は体部、底部ともに朱墨で記されている。661～663は碗に「仁」が記されている。661・662

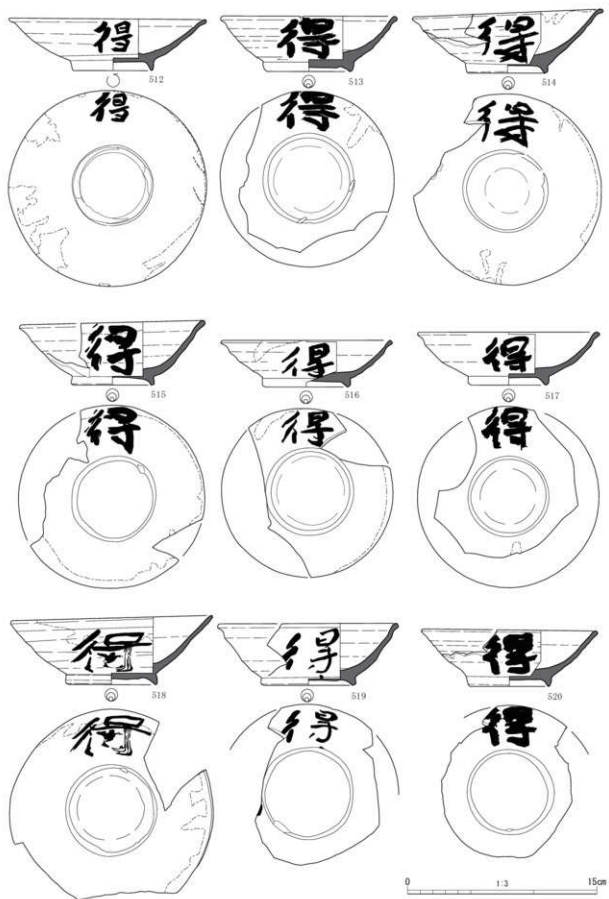


Fig. 209 SX01 中央部 出土遺物 (2)

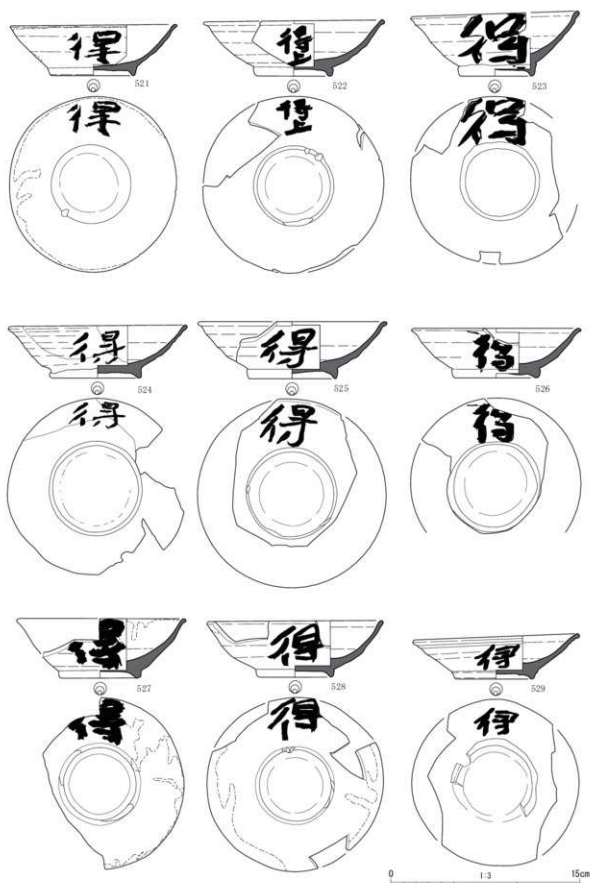


Fig. 210 SX01 中央部 出土遺物 (3)

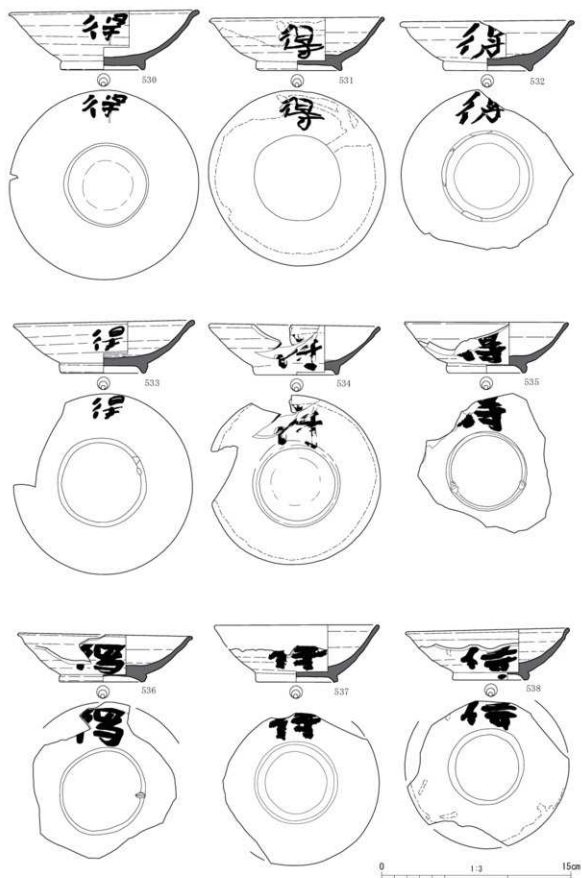


Fig. 211 SX01 中央部 出土遺物 (4)

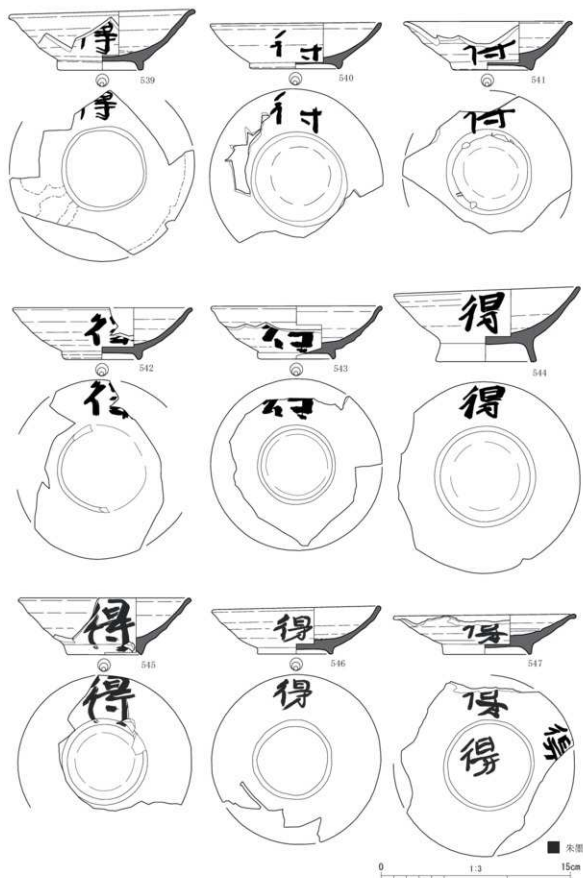


Fig. 212 SX01 中央部 出土遺物 (5)

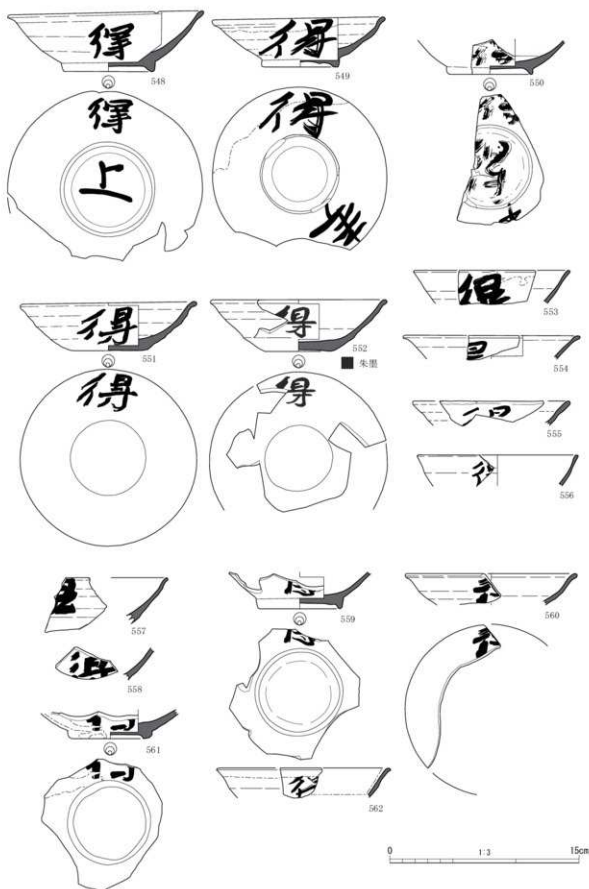


Fig. 213 SX01 中央部 出土遺物 (6)

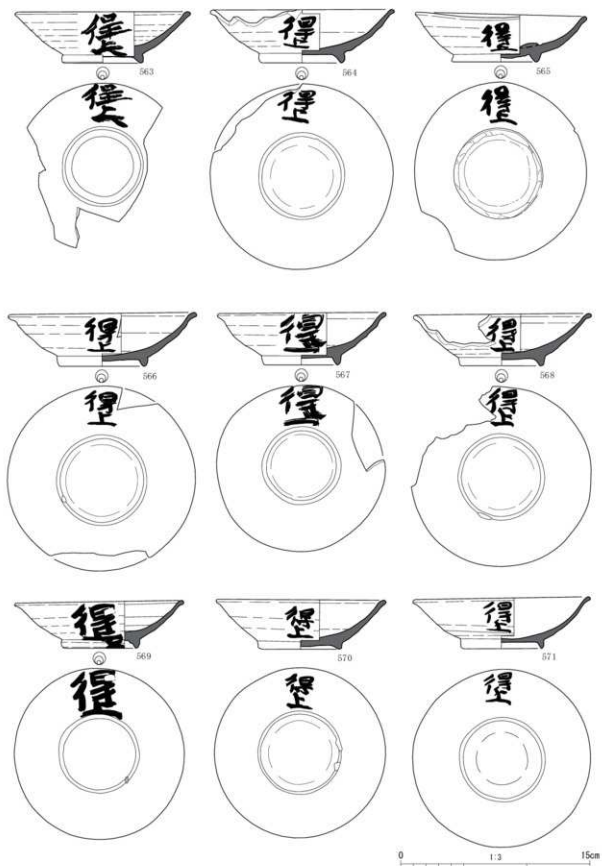


Fig. 214 SX01 中央部 出土遺物 (7)

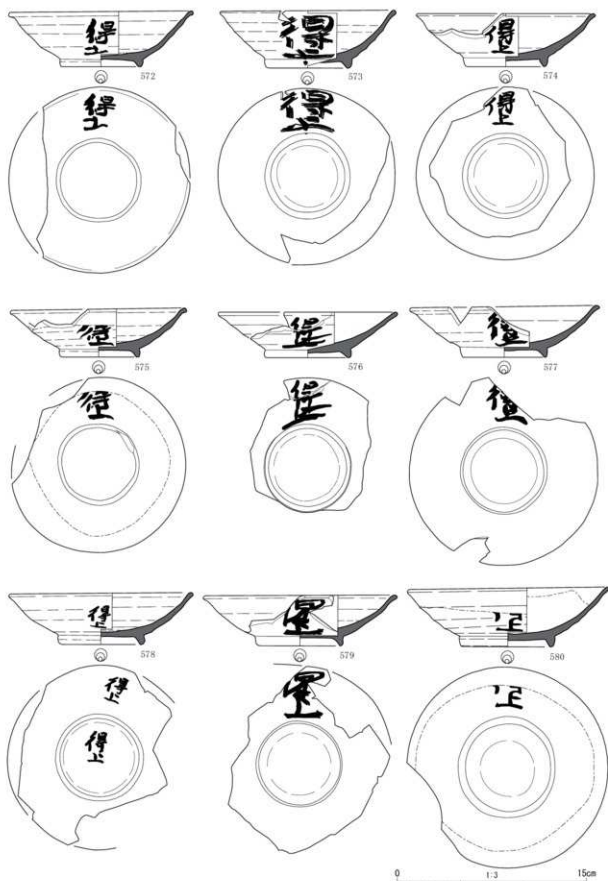


Fig. 215 SX01 中央部 出土遺物 (8)

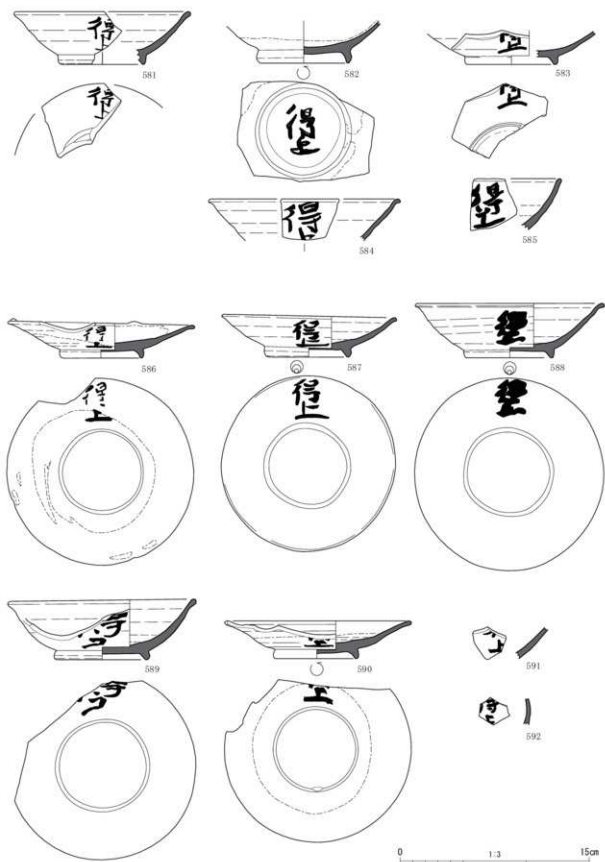


Fig. 216 SX01 中央部 出土遺物 (9)

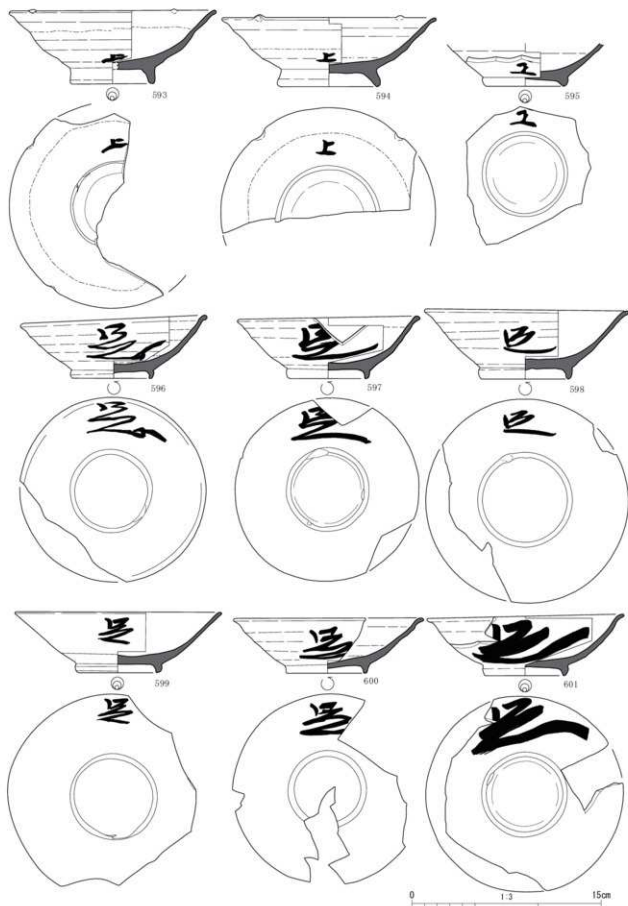


Fig. 217 SX01 中央部 出土遺物 (10)



Fig. 218 SX01 中央部 出土遺物 (11)

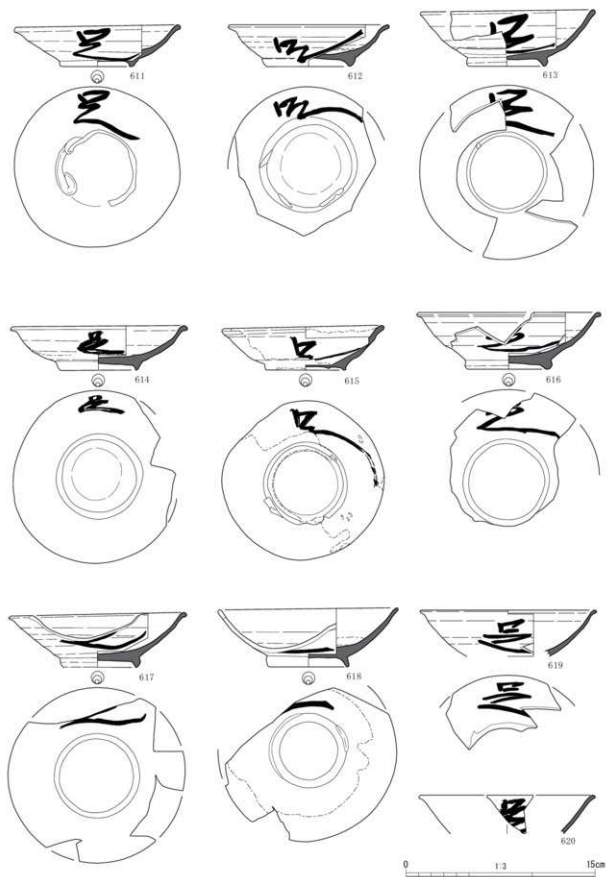


Fig. 219 SX01 中央部 出土遺物 (12)

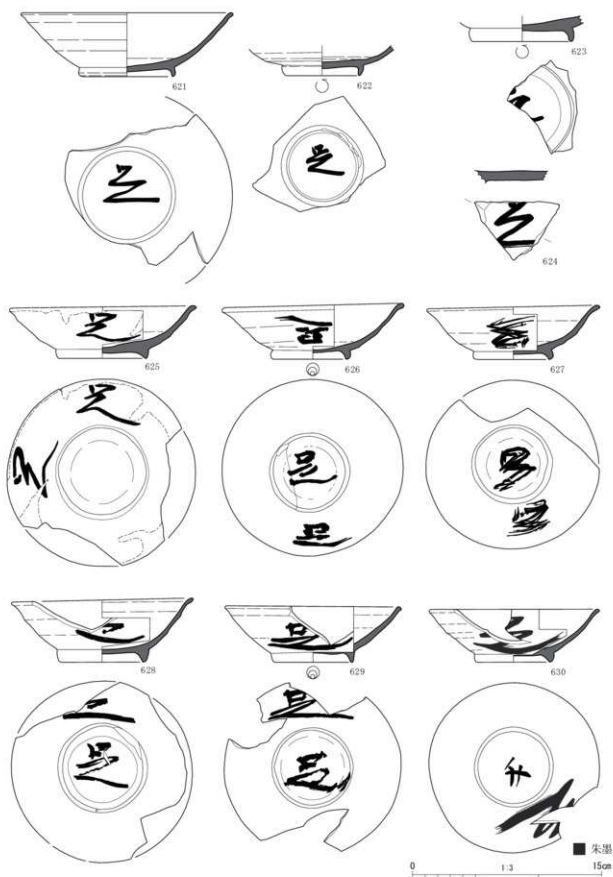


Fig. 220 SX01 中央部 出土遺物 (13)

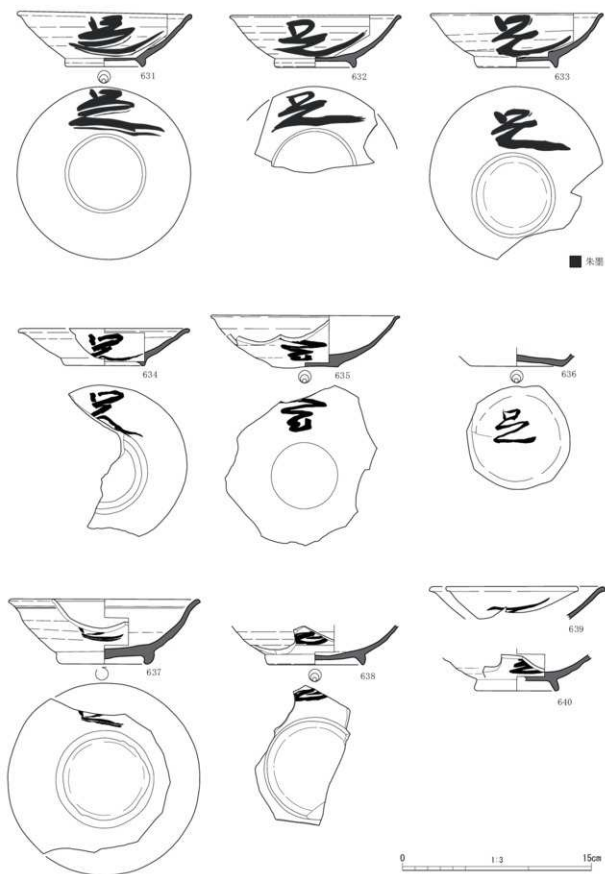


Fig. 221 SX01 中央部 出土遺物 (14)

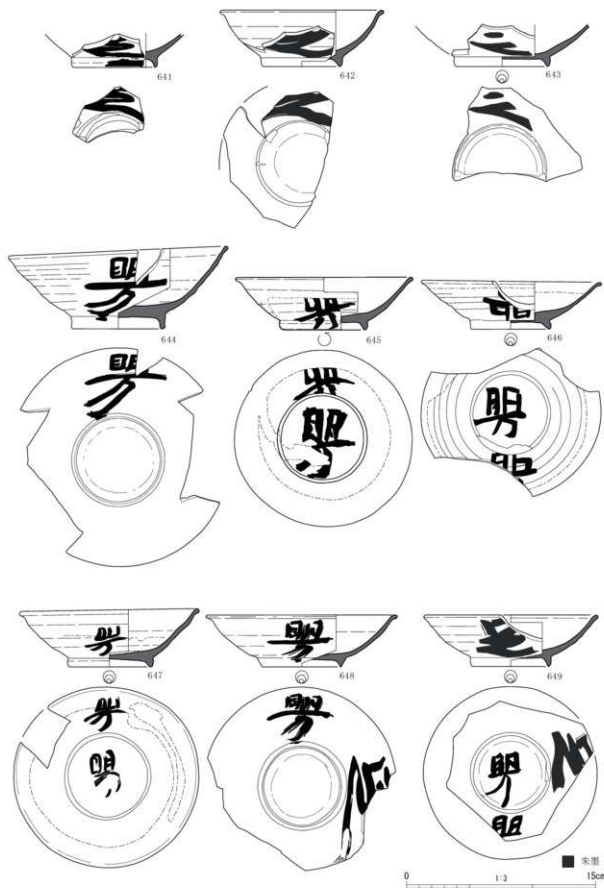


Fig. 222 SX01 中央部 出土遺物 (15)

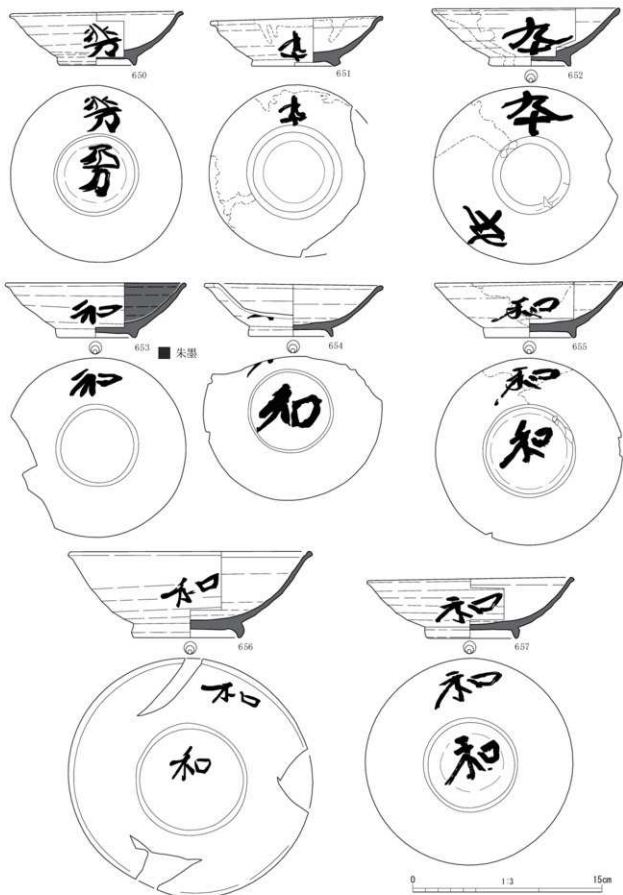


Fig. 223 SX01 中央部 出土遺物 (16)

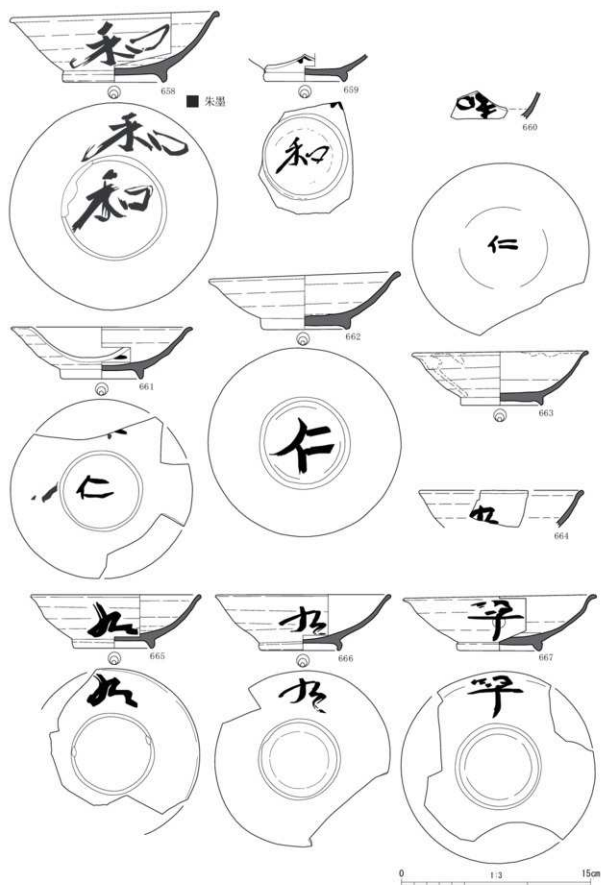


Fig. 224 SX01 中央部 出土遺物 (17)

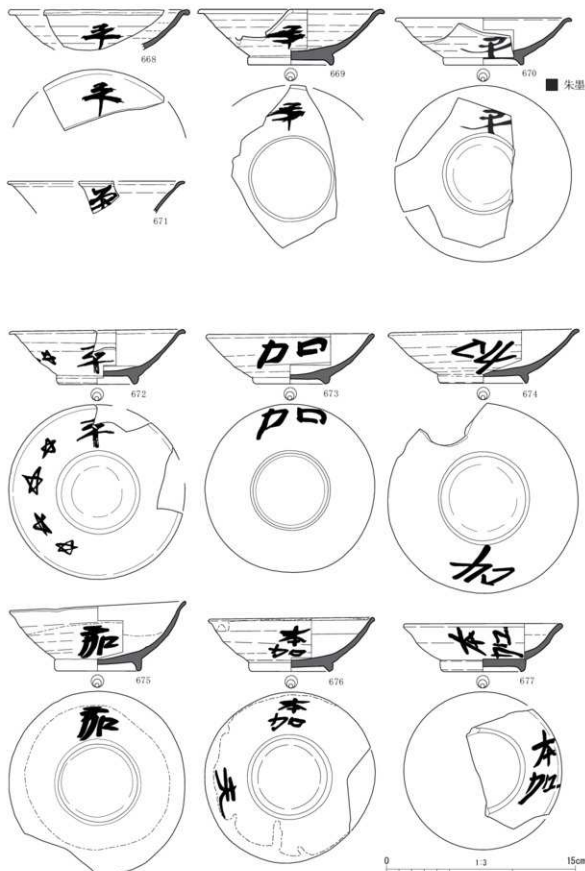


Fig. 225 SX01 中央部 出土遺物 (18)

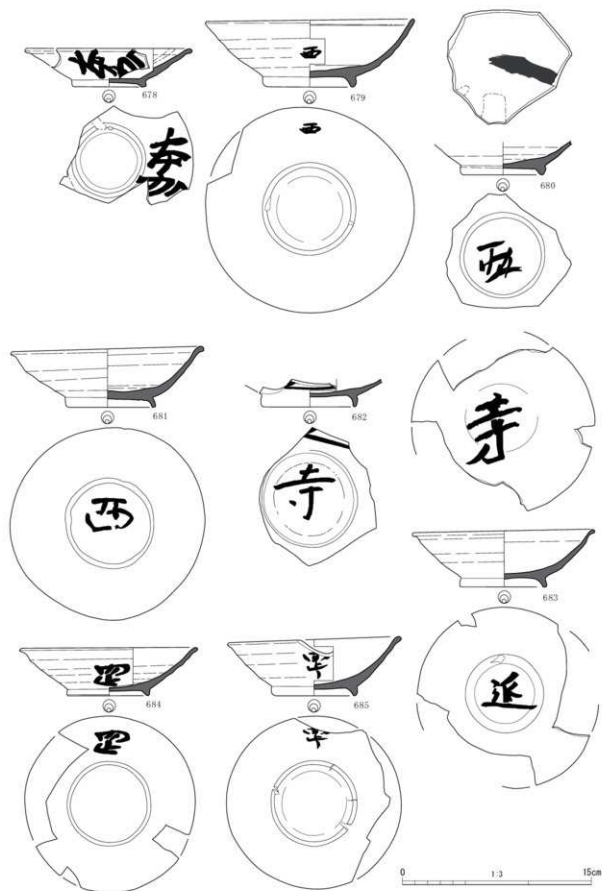


Fig. 226 SX01 中央部 出土遺物 (19)

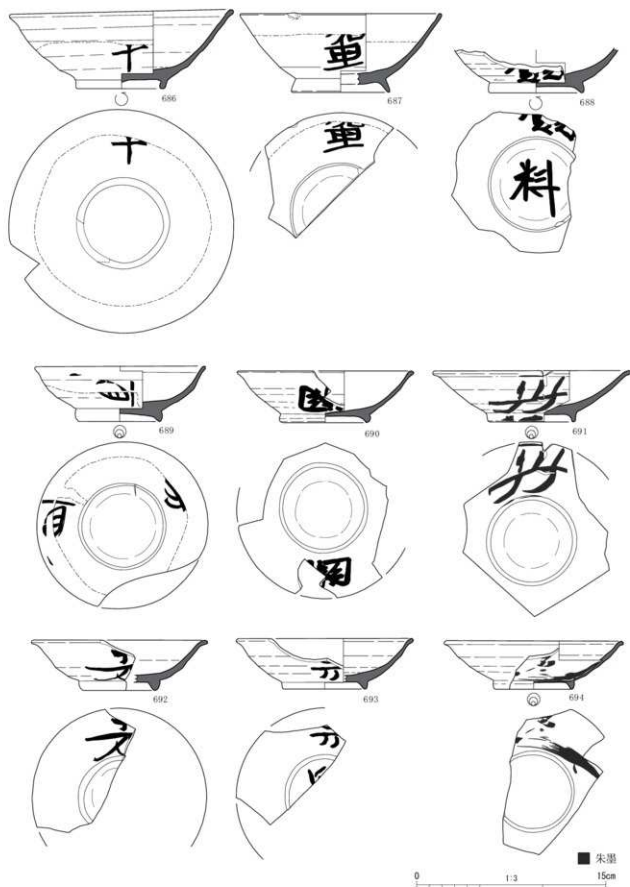


Fig. 227 SX01 中央部 出土遺物 (20)

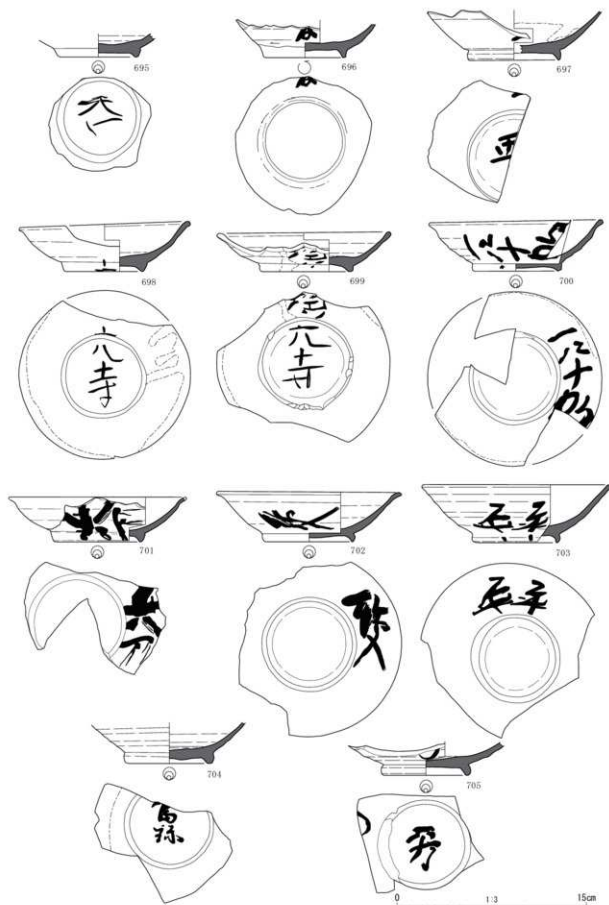


Fig. 228 SX01 中央部 出土遺物 (21)

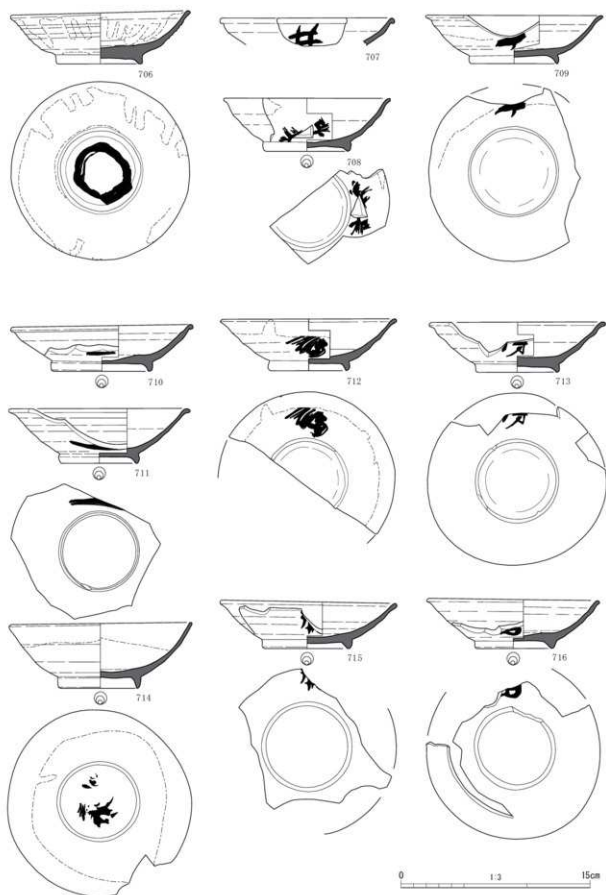


Fig. 229 SX01 中央部 出土遺物 (22)

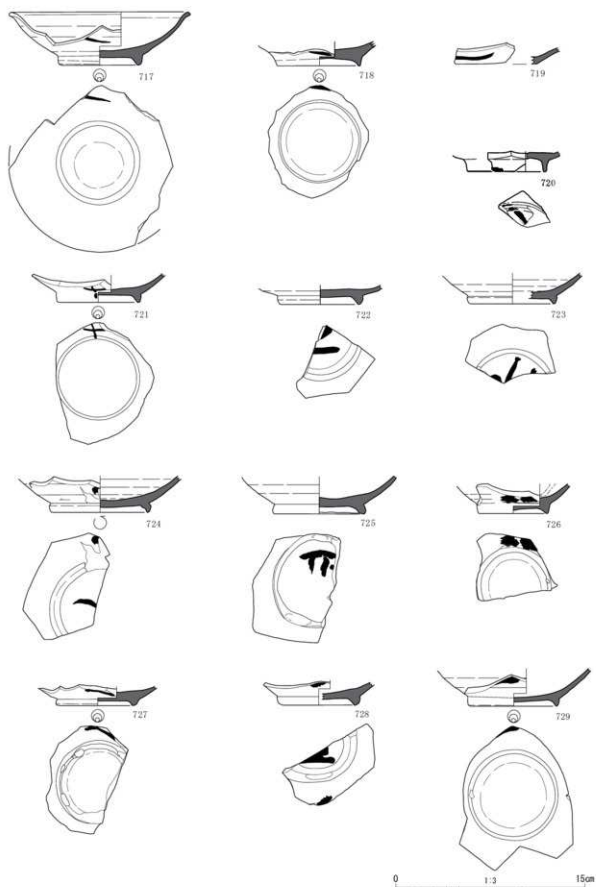


Fig. 230 SX01 中央部 出土遺物 (23)

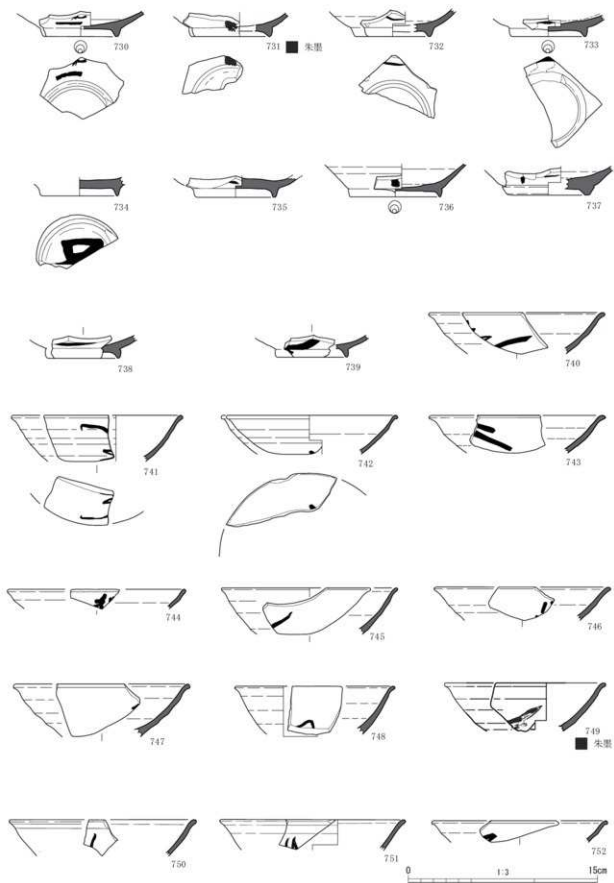


Fig. 231 SX01 中央部 出土遺物 (24)

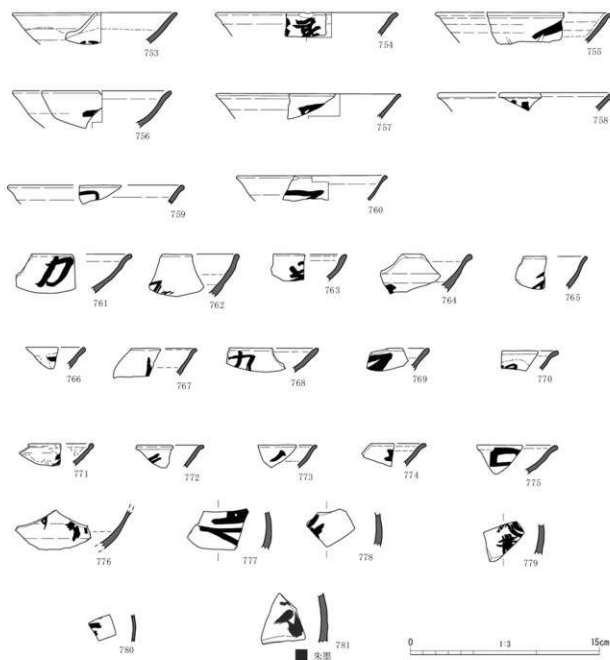


Fig. 232 SX01 中央部 出土遺物 (25)

は底部に、663 は内面底部にそれぞれ記されている。664 ~ 666 は碗の体部に「有」が記されている。664 は欠損により不明瞭であるが「有」と考えられる。667 ~ 672 は碗の体部に「平」が記されており、670 は朱墨で記されている。672 は体部4箇所に関連したサーマン記号の可能性のある記号が確認される。673・674 は碗の体部に「加」が記されており、674 は逆位で確認される。675 は碗の体部に「二加」が記されている。676 ~ 678 は体部に「本加」が記されている。675 ~ 677 は碗で、678 は皿である。679・681 は碗に「西」が記されている。679 は体部、681 は底部にそれぞれ記されている。680 は体部に「西」と考えられる文字が記されている。682・683 は碗に「寺」が記されている。682 は底部、683 は内面底部にそれぞれ記されている。683 は底部に墨書が

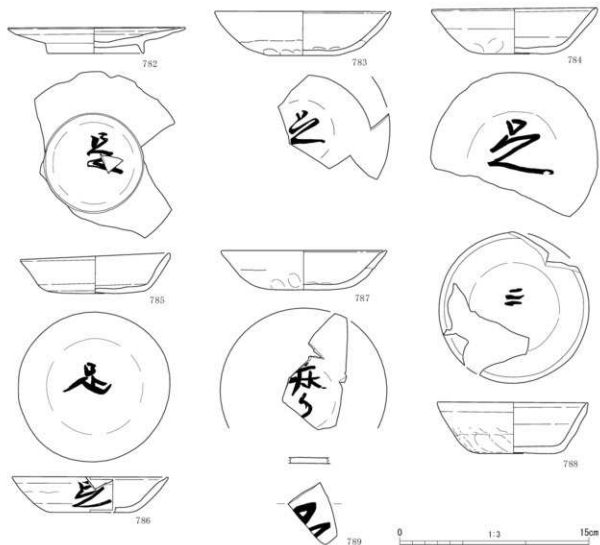


Fig. 233 SX01 中央部 出土遺物 (26)

記されているが判読はできなかった。684・685は碗の体部に「罍」が記されている。685は2文字確認されるが2文字目は判読できない。

686～697は墨書として認識できるが文字が不明瞭なものを示す。686は「平」、687は「得上」、692は「十万」、694は朱墨で「足」、697は「西」と考えられる。698・699は底部に「寺」と考えられる文字のほかに、別の墨書が確認されるが判別はできない。700は碗の体部に横位で「平」のほか、「加」と考えられる文字が記されている。701は碗の体部に横位で「六」のほか、「万」と考えられる文字が記されている。702は碗の体部に横位で「財」と考えられる文字と「入」が記されている。703は碗の体部に正位で平行して「平」と考えられる2文字が記されている。704は碗の底部に2文字確認できるが「弥」のみ判読できる。705は碗の体部及び底部に墨書が確認できるが判読はできない。706は碗の底部に墨書による円状の記号が確認される。707は碗の体部に墨書で井の記号が確認される。708は碗の体部に横位で「本」のほか「加」と考えられる文字が記されている。709は碗の体部に「平」と考えられる文字が記されている。711～795は墨書と認識できる

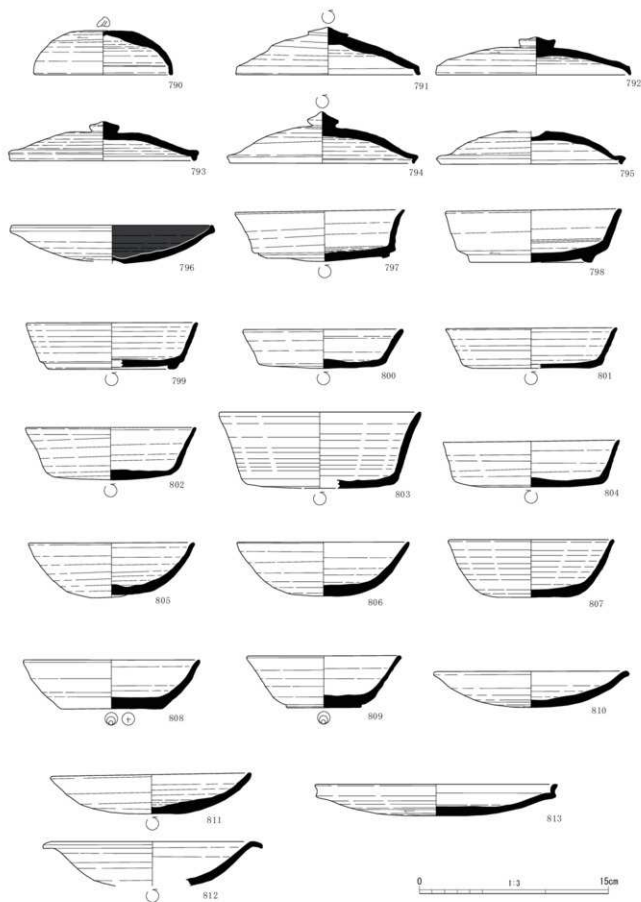


Fig. 234 SX01 中央部 出土遺物 (27)

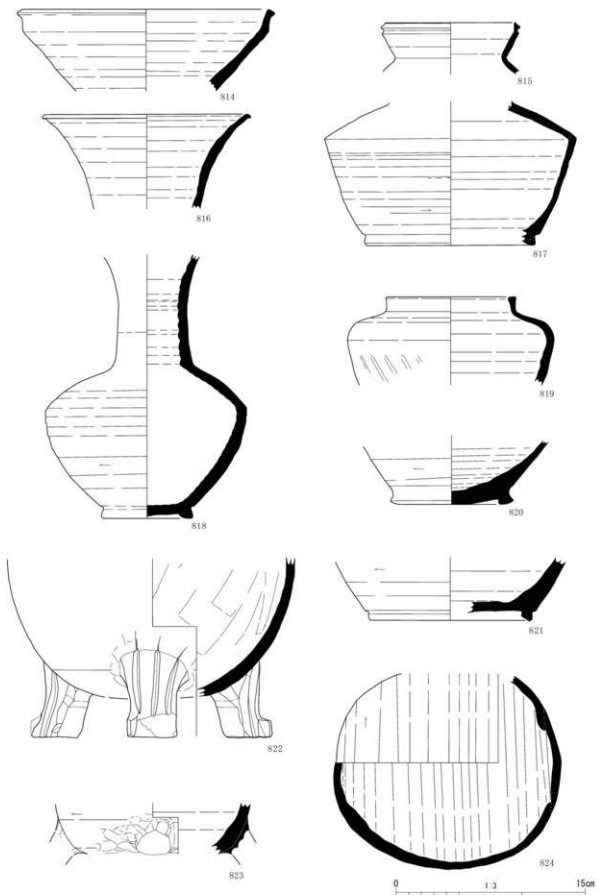


Fig. 235 SX01 中央部 出土遺物 (28)

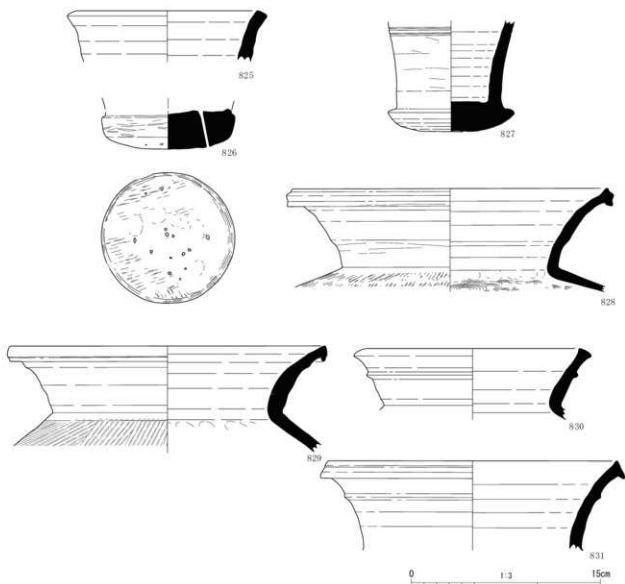


Fig. 236 SX01 中央部 出土遺物 (29)

が判読できない灰釉陶器を示す。712は碗の体部に不明瞭であるが「足」と考えられる文字が記されている。713は碗の体部に欠損により判読は難しいが「得」が記されている。欠損により判読は困難であるが、740・777は「足」、754は「得」、768は「有」の可能性が高い。781は朱墨で文字が記されている。

782～788は土師器に墨書が記されている。782は有台皿の底部に「足」が記されている。783～789は坏で783・785・789は底部に、786は体部にそれぞれ「足」が記されている。787は坏の底部に墨書が2文字記されているが判読できない。788は坏で内外面ともに赤彩が施されており、内面底部に「川」と考えられる墨書が記されている。

須恵器 (Fig. 234～236) SX01中央部より出土した790～831を示す。器種は、摘蓋、有台坏身、箱坏、無台碗、皿、鉢、壺類、横板、陶臼、甕、などが出土している。特に、出土例が少ない獣足壺が出土している。灰釉陶器、土師器と比較して出土数はやや少ない。

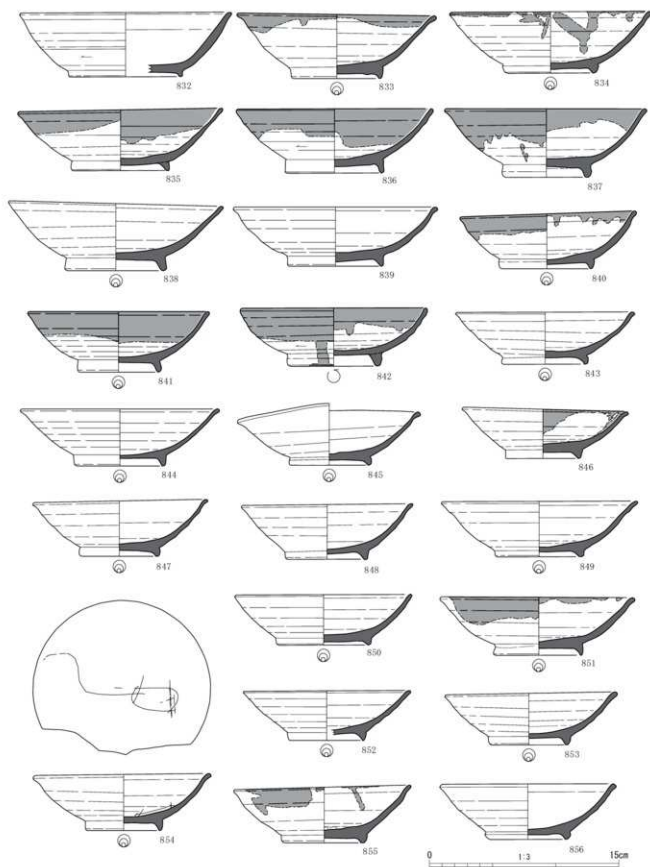


Fig. 237 SX01 中央部 出土遺物 (30)

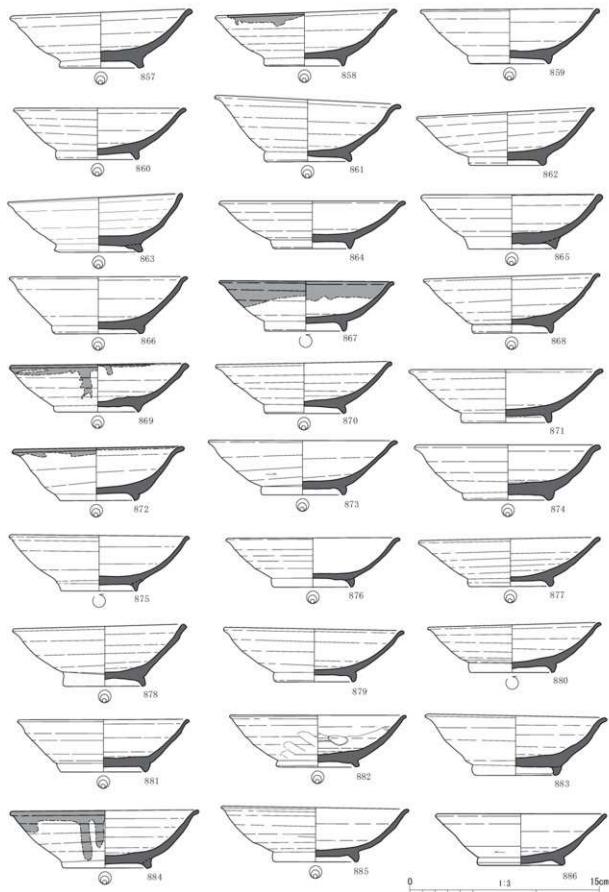


Fig. 238 SX01 中央部 出土遺物 (31)



Fig. 239 SX01 中央部 出土遺物 (32)

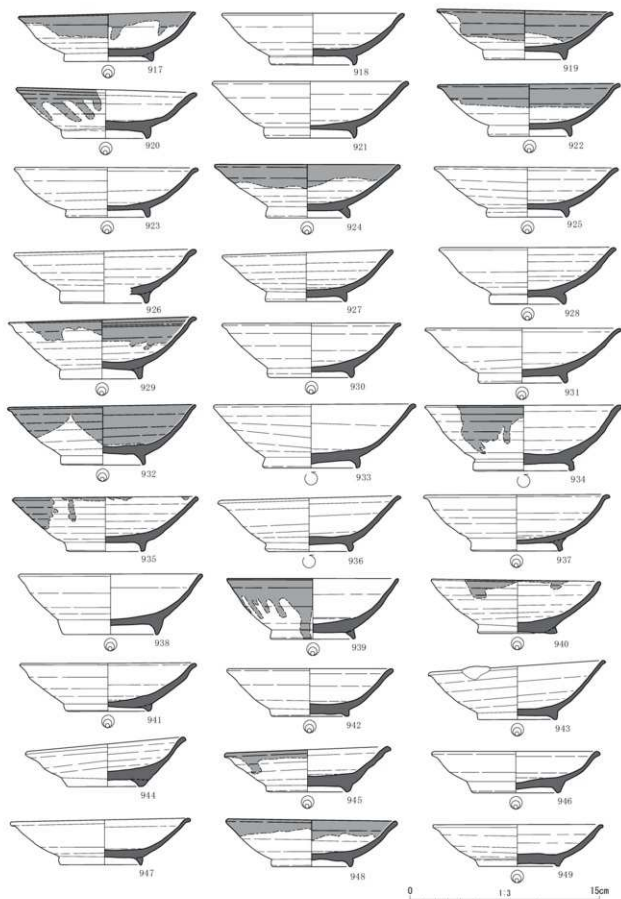


Fig. 240 SX01 中央部 出土遺物 (33)

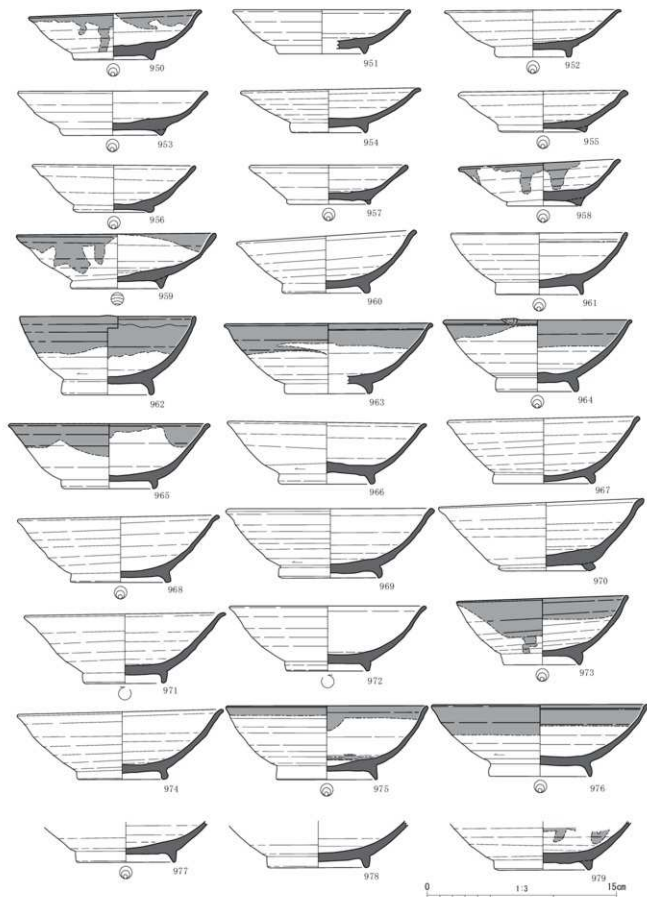


Fig. 241 SX01 中央部 出土遺物 (34)

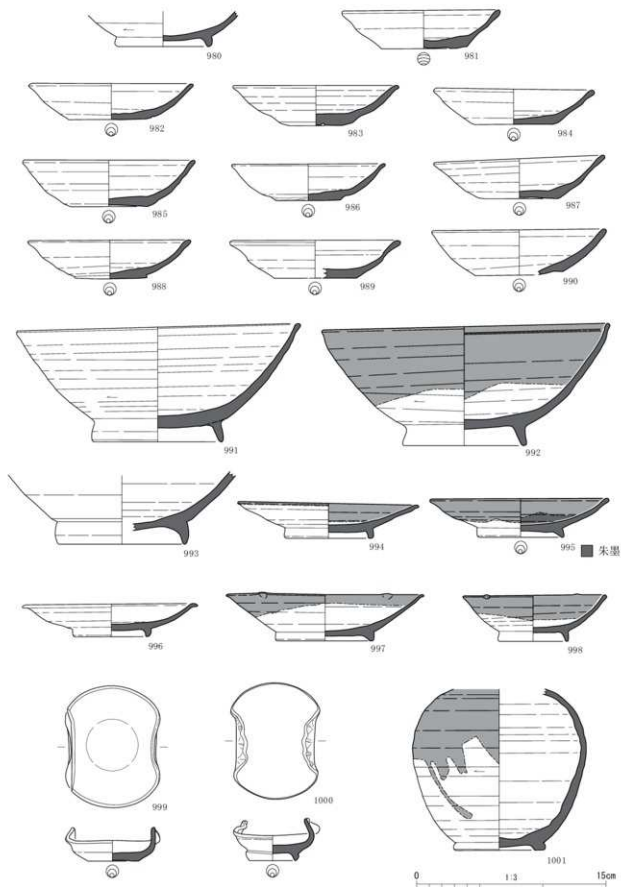


Fig. 242 SX01 中央部 出土遺物 (35)

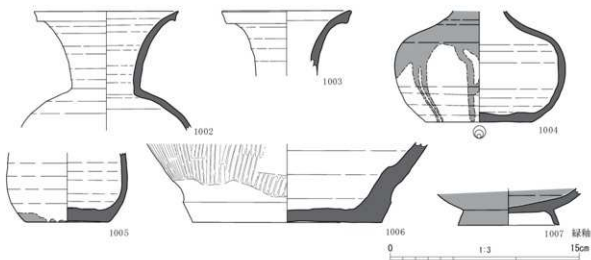


Fig. 243 SX01中央部 出土遺物 (36)

790は坏蓋である。Ⅶ層からの混入品とみられる。791～796は摘蓋である。794は宝珠型の摘部が高い形状であるため新手の様相を示す。796は内面全体に墨痕がみられ、また摩耗していることから転用硯と考えられる。797～799は有台坏身である。797は底部が高台より突出した形状である。800～804は箱坏である。803はほかと比較して器高が高い。805～807は無台碗である。807は底部がやや平坦である。808・809は糸切碗である。808の底部にはヘラ記号が確認される。810～812は皿である。812は口縁部が外反する形状である。813は盤である。814は鉢である。

815～823は壺類を示す。815～817は広口壺である。815は口縁部のみ残存しており、不明瞭であるが形状により広口壺と考えられる。口縁部に沈線が確認される。816は口縁部のみ残存している。817は口縁部が欠損しているが、体部の形状により広口壺と考えられる。818は長頸壺である。819は短頸壺である。外面体部に等間隔で斜めに沈線が確認される。820・821は壺の底部である。822・823は獣足壺である。822は1脚のみ残存していたが、体部の残存状態から、3脚存在していたと考えられる。823は脚部が体部から剥離している。824は横瓶で、口縁部が欠損している。825～827は陶臼である。826は底部に不規則な穿孔が確認される。828～831は甕である。828・829は外面にタタキ調整がなされる。830・831は口縁部中央に突帯が確認される。

灰釉陶器 (Fig. 237～243) SX01中央部より出土した832～1006を示す。なお、970は須恵器の有台碗の可能性もある。832～980、991～993は碗である。施釉方法や高台の形状、底部の痕跡など多種多様存在する。832は高台の断面が四角形であり、底部は欠損により不明瞭であるがヘラケズリと考えられることなど、形状に特徴がみられ9世紀前半(K14窯式)のものと考えられる。施釉は確認されない。854は内面に線刻が確認される。882は外面のナデが乱れる部分が確認されており、内面には詳細は不明であるが繊維状のものによると推定される圧痕が確認される。状態から意図的に施されたとは考えにくい。959は底部に静止糸切痕が確認される。991～993はほかの碗と比較して大型の碗で高台が高い形状である。981～990は無台碗で底部はすべて糸切未調整である。981は底部に静止糸切痕が確認される。994～996は皿である。995は内面全体に朱墨痕が確認される。997は輪花皿、998は小型の輪花碗である。999は無台の耳皿で、1000は有台の耳皿

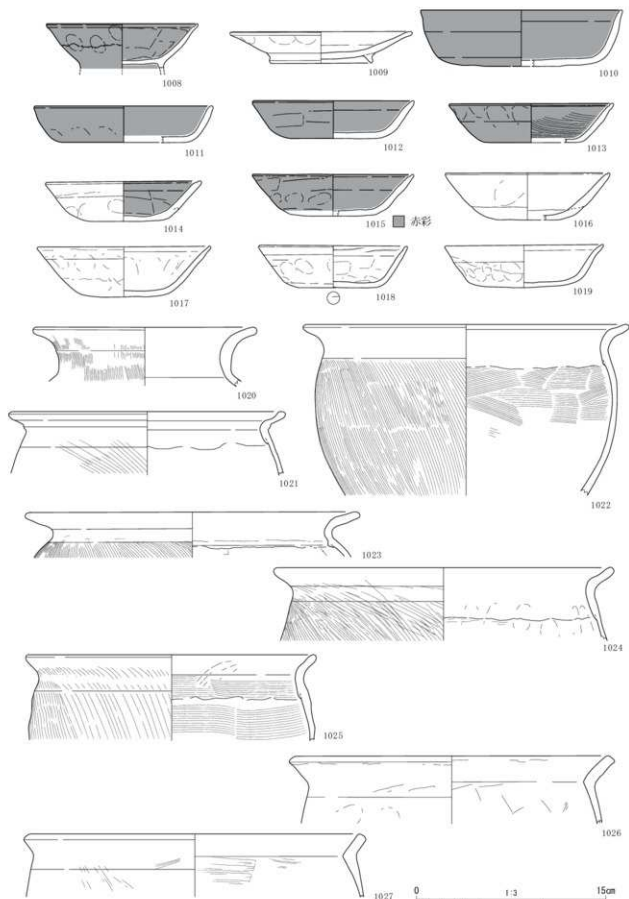


Fig. 244 SX01 中央部 出土遺物 (37)

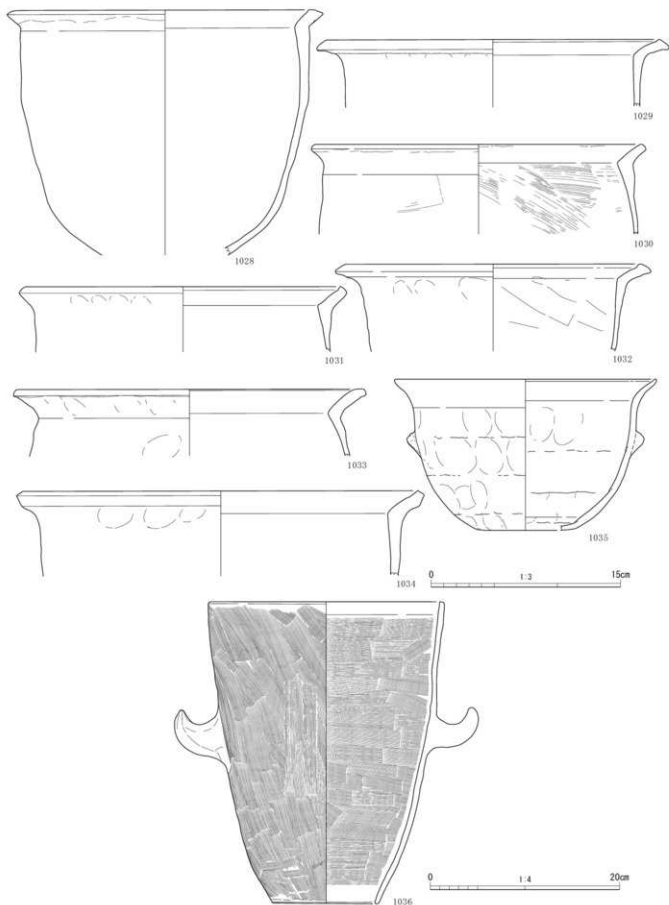


Fig. 245 SX01 中央部 出土遺物 (38)